

「価値観を変える勇気を」

西大和キリスト教会

宮澤 清志



全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。マルコ16・15

一九六〇年、オランダ・ライデン大学のヘンドリック・クレマーという教授が、日本基督教団の招聘を受けて来日されました。2ヶ月間に渡って日本各地の教会を見聞した彼は、離日する際の講演の中で、次のような言葉を語りました。

「(前略) まず結論を述べよう。日本の教会、諸君の教会は、かつて西洋の宣教師から与えられた概念、型、構造に、あまりにもキチンとはまりこみ、それに固執しすぎている！ しかもこのような過去のイメージが、諸君にとっては、聖なる、犯すべからざるもの、変更など思ってもよらぬものと考えられている。これは驚くべきことだ。だから、日本の教会は他に対して宣教しようとしながら、一般からは、真に自己中心的、閉鎖的生き方をしていると見られているのである。たとえば諸君は、教会といえは

制度化された教会が唯一の模範と想っているらしい。教会とは会堂と牧師がいるものだ、という考えに、諸君はまどわされている。(中略) 日本の教会は、伝道といえは直接伝道としか考えていないようである。私はこの誤解を是正したい。日本の現状では、直接伝道よりも間接伝道が特に必要なのである。つまり(中略)日本(中略)においては、西洋諸国の伝道のやり方、すなわち鳴物入りのキャンペーン型伝道が成功するとは、私には到底思えない。(後略)」

長い引用になりました。50年以上前に、ただか2ヶ月間の訪日においてこの教授が指摘したことは、現在でも何ら変わっていないような気がしてなりません。今までの伝道方策を後生大事に守り続け、教会(堂)に幼子が来ないとか嘆き続け、そうでありながら何も手につけないとしたら、私たちは終わりの時にその責任を問われることになるでしょう。教会堂に待ちつつ幼子を呼ぶのではなく、私たち自らが幼子のいるところへと出て行きましょう。幼子は私たちを待っているのです。

「神よ、変えることのできないものを受け入れる潔さ、変えることのできるものを変える勇気、そして両者の違いを見分ける知恵を、私たちにお与え下さい」(ラインホルド・ニーバー)。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
カリキュラム	3
教師養成講座	4
「分級を充実するために―教員の経験をもとにして―」	15
旧約⑩「捕囚期」	10 / 6 / 10 / 20
キリストの教えと働き	10 / 27 / 11 / 24
クリスマス・年末年始	12 / 1 / 12 / 29
牧羊ひろば（名古屋東教会）	93
「牧羊者」のご購読・ご利用について	96
おわりに	96

〔凡例〕

1. 原語について：ギリシャ語は〔ギリ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教団出版局）、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出版局）、イン：「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校部）、ふ：「ふくいん子どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」（以上、日本児童福音伝道協会）、PW：「プレイズワールド」（リビングプレイズ）



●旧約⑩捕囚期

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
10月6日	世の汚れに染まず	ダニエル1：8～16	同8節
13日	神礼拝を貫く	ダニエル6：1～24	同22節
20日	命がけの決断	エステル4：1～17	同16節

●キリストの教えと働き

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
10月27日	失望しないで祈る	ルカ18：1～8	同1節

●クリスマス・年末年始

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
11月3日	義とされる道	ルカ18：9～14	同13節
10日	キリストに徒う道	ルカ18：18～30	同22節
17日	キリストとの出会い	ルカ19：1～10	同10節
24日	収穫感謝 収穫は神の恵み	使徒14：8～18	同17節

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
12月1日	主を待ち望む者の力	イザヤ40：27～31	同31節
8日	再臨の主を待ち望む	黙示録22：12～21	同20節
15日	すべての人を照らす光	ヨハネ1：9～14	同9節
22日	クリスマスのプレゼント	ヨハネ3：16～21	同16節
29日	年末感謝 神の恵みを覚える	詩篇103：1～22	同3節

「分級を充実するために

―教員の経験をもとにして―

神戸中央教会 鎌野健一



わたしは、幼い時から日曜学校（かつては教会学校のことをそう呼んでいました）に集っていました。先生方から聖書の話聞かせていただいていた。賛美もよく歌っていました。教材として特別なものは有りませんでした。聖書物語の紙芝居を何度も何度も見せていただきました。ナアマン將軍が、ヨルダン川で七度つかり、上がった時のナアマン將軍の喜びの笑顔が、今でも脳裏に残っています。また、信仰偉人伝の紙芝居もありました。特に良く見せていただいたのが

「新島襄」の紙芝居です。講堂で学生たちの前で自分の腕を鞭で打ちつけている場面も忘れることのできない画面です。

このように、幼い時の教会学校の出来事は70年経った今も忘れることのないものです。

18歳の時に神戸に嫁いだ姉の家で下宿をしましたが、そこ

では、家庭を開放して教会学校を開いていました。当時は、家庭の教会学校さえ、40名を超えるほど集まっていました。教会学校全盛時代でした。

教会学校の働きのために自分の生涯すべてをささげた義兄にいろいろと教わりながら、65歳まで奉仕をさせていただきました。その間、結婚をし、子どもも与えられ、その子どもが、教会学校の教師になるという素晴らしい恵みをいただきました。

65歳からは、教会の成人科の責任を持つようになり、教会学校の働きは若い人に譲りました。

その間に牧羊者に一年間小学校上級の教案を書きました。その時の原稿をもとにして、わたしの分級に対する考え方をまとめてみます。

この原稿は十月からの牧羊者に記載されますが、四月からの分級をどのように取り組んでいけばよいか、具体的に書いてみます。また、実際に当時の分級の教案をもとにして考えてみたいと思います。

教師へ

四月第一週

四月のはじめ、それぞれの教会学校では新しく担当の学年が決められることでしよう、まず、第一週、子どもたちとの出会いが始まります。どんな場合でも同じことですが、最初の出会いほど大切なものではありません、これから一年、子どもたちと聖書を学んでいくのですから（それだけではありません。子どもたちに神を知らせ、救いへと導いて行くのです）、軽率な気持ちでは教会学校の責務を果たすことができません。担任が決まれば、すぐその時から愛と信仰をもつて祈り込んで行きたいものです。

四月第二週

あなたは、もう子どもたちの名前を覚えたでしょうか。

子どもたちを知る最初の手がかりは、名前を覚えることです。名前を覚えずして、どうして心を注ぎ出して祈ることができのでしょうか。私が教会学校の教師をしていた時代は、子どもたちも多く、また、新しく来る子どもも多かったのていゝろと工夫をして子どもたちの名前を覚ええました。

いろいろと名前を覚えるゲームがあります。子どもたち同士も名前を覚えることが大切ですので、次のようなゲームをしてお互いの名前を覚えるようにしましょう。

【例】「名前リレー」方法はまず教師が「私はAです」と言います。隣の人は「私はA先生の隣のBです」と言います。その隣の人が「私はA先生の隣のBさんの隣のCです」と言うように続けていきます。二、三周もしていくうちに全員の名前を覚えます。

四月第三週

あなたは、子どもを知るためにどのようなことをされていますか。子どもを知らずして子どもを導くことができません。

子どもを知る一つの手がかりに、まとめの問題があります（まとめの問題については、次の項で説明をいたします。）

四月第四週

先週は子どもを知るための一つの手がかりを書きました。今週はもう一つ書いてみます。

あなたは、分級がすんだ後どうされていますか。分級が終ればそれで終わりとは考えずに、一つの輪になり子どもたちの学校の様子を聞いてあげます。一学期の最初です。子どもたちは学校の担任の先生や、友だち関係に不安を抱いています。そこで、「今の担任の先生はどんな先生なの」と聞いてみましょう。きっと子どもたちはいろいろなことを言いだし、自分から何も言いたくない子には直接教師が問いかけてください。いいことばかりでない場合もあります、しかし、その時は担任の先生の気持ちをくみ取ってあげてほしいと思います、たとえば「○○先生、宿題がものすごく多いからいやねん」と出れば「○○先生、きっとみんなに期待をかけているのでしょうね。一年間頑張ればすごく力がつくよ。楽しみね」というように、担任の先生を決してけなすことのないように。

四月第五週

子どもを知っていたくために、もう一つやっていただき

たいことがあります。それは、子どもたちが学校で学習していることを是非知ってもらいたいことです。その方法の一つは、子どもたちが学校で使用している教科書に目を通すことです。一つ上の学年の子どもにも頼めば、案外手に入ります。また、新しい教科書ならば、大きな本屋で聞けば教科書を扱っている本屋を教えてください。分級の時に子どもたちが学校で学習していることを持ちだせば、子どもたちの顔の色が変わってきます。そして「先生、よう知っているね」とびっくりします。

また、日曜日に子どもたちの通っている学校の授業参観、運動会等の学校行事で分級が開かれないうちには、ちよつと学校の教室を覗いてみてはいかがでしょうか。子どもたちが喜ぶだけでなく、学校の雰囲気、教え方などよく分かります。自分の子どもがいけない方が、授業を見ると大いに参考になります。機会があれば試みてください。

分級教案例

一カ月が終わりましたので、四月の分級教案例を書いてみます。現在の牧羊者には教案が記載されていません。分級をし

ていくには、前もって教案を作成して分級をしていくことが大切です。四月の一カ月の教案を書きます。やはり、分級をしていく上には教案が是非必要です。これを参考にして、毎回教案を書いて分級に臨むことが大切です。土曜日だけ牧羊者を見るだけでは、大切な聖書の教えを教えることができません。

是非、簡単でもいいですが、教案を作ってみて分級に臨んで欲しいと思います。そのためには、牧羊者が手許に届けばすぐに最低一ヶ月間の内容を読んでください。そして一週間かけて準備を整えてください。

四月第一週教案

一、ねらい 世界は、神の創造によるものであることを知る。

二、子どもの実態 世界は偶然にできあがったものであるとは、あまり思っていない。だからといって、神がすべて創造したものであるとも思っていない。その原因は、神の力の大きさがつかめていないところにあるようです。

三、聖書の中心的教え 「はじめに神は天と地とを創造された」。このことばを中心として教えるべきでしょう。それと同時に「神は見て良しとされた」(創世記1・4、10、12、

18、21、25)の言葉も、忘れてはならない言葉でしょう。

四、教師の構え 人間的な注釈を加え過ぎると、かえってわかりにくいでしょう。まず、教師自身が、神は歴史を超越して永遠に存在される唯一の方であることと、神の創造のわざを信じることが大切です。これが信仰の基礎です。

五、子どもの成長 神は宇宙が存在する以前からおられた方です。全宇宙から身のまわりの植物、動物まで創造された神の力の大きさがわかるとともに、わたしたちを愛してやまない神の愛を分かせたい。

六、展開

①物にはすべて造り主がある。手許にある腕時計をもとにしてもいいでしょう。決して偶然にできたものではないことをしっかりと押さえることが大切です。

②天地宇宙の存在する以前に、神は存在しておられたのである。わたしたち日本人は、神といえば人間が造りだしたものを思いやすいです。しかし、聖書は「はじめに神は…」と記してあります。永遠から永遠に生きて存在しておられる方であることを、押さえるようにします。

③永遠に存在されるお方が、天地宇宙、すべてのものを創造されたのである。第一日…光と闇、第二日…天、第三日…

地と海、植物、第四日…天体、第五日…水生動物、鳥、地上の獣、第六日…家畜。聖書の言葉を中心におさえます。できれば「聖書パノラマ」(いのちのことば社) Iの図を参考にされ、視覚教材を作成されると思います。マスクをして、第一日、第二日の順に繰り出されていくようにすると、子どもたちは興味をもちます。また、次週にも使用できます。

④神の創造のわざは、計画のもとに行われ、それはすべて私たちを愛する愛のゆえになされたものである。ここが中心です。「神は何のために、この世界を創造されたか」。この問いかけを子どもたちにぶつけて考えさせてほしいものです。これは次週のふみ台になっていきます。神はすべてを創造されて「良しとされた」のです。

七、まとめ

「神は、何のためにこの世界を創造されたのか」。

A4の用紙を半分に切り、前もってこのまとめの問題を書いておく。子どもたちに自由に書かせます。

四月第二週教案

一、ねらい 私たち人間は、神のかたちに似て創造されたものであり、神によって祝福されたものであることを知る。

二、子どもの実態 人間は他の動物と違って理解している。ところが、人間を創造された神の意志が理解できていないばかりか、人間が神を造ったものであるとの意識が大きい。

三、聖書の中心的教え 神は人間を祝福し愛しておられる。そのあらわれの一つは神のかたちに創造されたことであり、二つは量的のみならず質的にも地に満ちさせようとしていてことであり、三つは人間のまわりにあるものすべてが人間のために創造されたことである。

四、教師の構え 私たちのまわりのものすべてが私たちのために整えられており、ひとり子イエスを十字架にかけてまでも神は私たちを愛しておられる。この事実を教師自身が見直し、子どもたちに話しかけたいものです。

五、子どもの成長 神は私たち人間を心から愛して、祝福されたのだ。だからこそ、私たちが神のもとに立ち返り、神の意志のままに歩むことが必要なのだということをわかせたい。

六、展開

①神は私たちを愛するゆえにこの世を創造されたのである。先週のまとめからスタートするといえます。

②まわりのものすべてを整えてから、神は人間を創造された。

「神は一番最初に人間を創造しないで、最後に人間を創造されたのはなぜか」。これについて考えさせます。神がいつさいの冠として人間を創造された事実を十分に把握させます。

③神は私たち人間を祝福された者として創造された。

・神は自分のかたちに人を創造された（創世記1・27）。

・神は彼らを祝福して言われた。「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ」（1・28）。

・神はまた言われた。「わたしは……すべての草と…すべての木とをあなたがたに与える」（1・29）。

この三点から神の人間に対する祝福を知らせるといいです。しかし時間に余裕がないと思いますので、どれか一つを重点的に考えさせてみる方がよいです。

④神は創造されたすべてのものを見られ、満足された（1・31）。

七、まとめ

「神は私たち人間を祝福されて創造されたのに、なぜ人々は人を憎み、自分かつてな生活をするのでしょうか」。

次週につながる大切なまとめの課題です。子どもたち

の実態をつかむ大切な課題です。

四月第三週教案

一、ねらい 神に祝福され創造された人間の中に、罪が入ってきたことを知り、私たち自身も罪を持った存在であることを知る。

二、子どもの実態 子ども自身、自分の中に罪があることを知っている。ところが、罪の当然の結果として、何があるかということを知っていない。

三、聖書の中心的な教え ①神の命令を正しく理解しないでヘビに誘惑されたエバ（創世記3・1～7）。②罪を犯した者の態度（3・8、12～13）。③罪の結果（3・14～19）。この三点を中心として教えるべきでしょう。

四、教師の構え 神のよって祝福されて創造された私たちが罪により永遠の滅びに向かって歩んでいた事実。しかし、キリストの十字架の血潮により、罪が赦されたのみか、永遠の生命を得ている。この恵みに感謝しつつ、子どもたちに語っていくようにしたいものです。

五、子どもの成長 わたし自身は罪人である。だから、罪を犯してしまう。このままでは永遠の滅びである。しかし、

イエス様がこの罪のある私を赦すために、十字架にかかって血潮を流してください(死んでくださった)。この神の愛を分かりたいです。

六、展開

① 私たちには、神から離れようとする罪の心がある。先週のまとめの問題から問いかけてみます。子どもたちの書いたものから一、二枚選び出し読み、聞かせてもいいと思います。このところで今日の中心的なねらいをはっきりさせておきます。

② 私たちは生まれつき罪人である。教師自身の子どもの頃のことを話してみてもどうですか。誰に教えてもらわなくても罪を犯してしまう人間の姿を知りたいです。

③ エバが罪を犯すようになってしまったのは、神の命令を正しく理解していなかったからである。2・15と3・2と3を比較しながら読ませて考えさせます。(正しくは直接神からの命令を聞いたのは人(アダム)であるが、このところを詳しく説明すると時間がないので、アダムがきちんとエバに伝えたとして理解しておく)。

④ 罪を犯した者(神の命令に従わない者)の態度は、神から離れ隠れようとする。責任を他に転嫁させようとする。(3・

8と13)を物語形式により話して聞かせます。

⑤ 神は罪を犯した者に対して裁きを下される(3・14と19)。へびに、女に、アダムに対して裁きをくだされました。「罪の支払う報酬は死である」と押さえます。

⑥ しかし、アダムやエバのために神様は皮の着物を与えられた(3・21)。わたしたちの罪を赦すためにイエス様が十字架にかかれて、死んでくださったのである。救いの事実を伝えます。

七、まとめ

「私たちが罪人であるということは、どんなことから分かるでしょうか」。

この日の内容は多くあります。③から⑤までをできるだけ手短かにまとめる必要があるでしょう。

四月第四週教案

一、ねらい 罪を犯した私たち人間を救い出すために、神はアブラハムを選び、救いの計画を推し進められたことを知る。

二、子どもの実態 自分が罪人(神の命令に従わず、してはいけないことになってしまう性質をもった者)であるという意識

をもっている。しかし、どんな人でも罪の性質をもったものであるから、気にする必要がないという考えで生活し、罪の生活から抜け出そうとする意識が弱い。

三、聖書の中心的教え 神がアブラハムに語られた救いの約束の言葉（創世記12・1～3、7）と、それに対するアブラハムの従順な態度（12・4～5、8）を中心として教えるべきでしょう。

四、教師の構え 祝福されて創造された人間が、罪のために滅ぼされていく姿を、見るに忍びなかった神の人間に対する一方的な愛を教師自身が味わい、子どもたちに語りかけたいものです。

五、子どもの成長 このままでは滅びの生活なのだ。この私を恵みに満ちたいのちの生活に移すために、私が生れる以前から、神様は計画され、実行されてきたのだ。私も神様から一方的な愛を持って選ばれているのだ。

六、展開

① 私たちは罪人（してはいけないことをしてしまう性質をもった者）なのだ。先週のまとめを使って再確認

② だから、このままでは滅んでしまうのだ。「このままの生活ではどうなっていくのだろう」という問いかけを投げかけ

てみます。

③ 私たち人間を創造してくださった神は、この姿を見るにしのびない。救い出した。火事で逃げ遅れた子どもを助けようとする親…このような事実がニュースとして報道されます。それを使ってこの親の気持ちから創造主なる神の愛を分かせたいです。

④ 神は救い主キリストが来られる準備の第一としてアブラハム（アブラム）を愛して選び、神の示される国へ行くようにされた（12・1～3）。

⑤ アブラムは行き先を知らなかったが、神様の言葉に従って行った（12・4）。④、⑤は物語形式で、分かりやすく話していきます。中心点はしっかり押さえるようにしてください。

⑥ 私たちもアブラムと同じように、神様から愛され、選ばれている者である（ヨハネ15・16）。アブラムの選びだけで終わらず、自分自身の問題としてとらえさせたいです。教師自身が愛され、選ばれていることの事実を、子どもたちに話します。

七、まとめ

「神様から愛されているなと感じたり、思ったりしたこと

を書いてみましょう」。

教師自身の体験が子どもたちにも有るように祈りつづき問いかけてください。

分級教案の意図について

現在の教案は分級の教案が書かれていなく、礼拝のメッセージ例が記されています。これをもとにして各学年の分級を考えてみましょう。

わたしの分級教案の意図についてまとめてみます。

一、ねらい

その当時の牧羊者カリキュラムの目標に沿って書きました。年間のカリキュラムが作成されていますから、その目標が大切です。できればその学年に応じるように具体的にしていけることが大切です。

しかし、どんな場合でもねらいが教師自身はつきりしてないと、分級全体がだめになってしまいます。子どもの実態をよく見極め、教師自身がねらいをはつきり立てて分級を進めてほしいです。

二、子どもの実態

分級をしていく時に、どうしても子どもの実態をつかむ必要があります。目の前にいる子どもの実態をよく知る必要があります。目の前にいる子どもたちをどのように導いていくかはつきりつかまないと、分級が宙に浮いたものになってしまいます。ここに書いた子どもの実態は、私の目の前にいる子どもたちの様子を思い浮かべたり、子どもたちに問いかけたりしていきながら書いています。ですから先生方の目の前にいる子どもたちと異なる場合も多々あるはずです。テレビが各家にあるような今日です。農村と都会のちがいがうすくなったといっても、子どもたちの様子には違いがあります。

また、教会や教会学校の伝統によっても異なります。ですから、わたしの書いた教案の書いた子どもの実態を一つの目安として、先生方の目の前にいる子どもの実態をよくつかんで、分級に臨んで欲しいです。子ども実態をつかんだ時に、自然にどのように導いていかなければならないかが分かってきます。

三、聖書の中心的教え

聖書の箇所をどこも教えたいと思いますが、ねらいに即したところを重点的に取り扱うようにします。あれもこれと

いう気持ちを抑えて、内容をしばって話すことが大切です。そうすることによってこそ、子どもたちの魂に深く入ることが出来ます。

四、子どもの成長

「子どもの実態はこうだ。だからこのねらいによって、聖書のこの箇所より、この内容を教えたい」という願いによって分級が始まります。これだけではまだ、目的がはっきりしません。目の前にいる子どもをこのようにしたいという祈りがあるはずで、それが、子どもの成長です。目の前にいる子どもの実態から成長していく子どもの姿を書いています。この教案は執筆者の目の前の子どもたちに対する案であって、先生方一人一人は良く祈り、子どもの実態をよく見極めた上で、自分なりの教案を作成してください。そうすることによってのみ、子どもの魂に届くことができます。

五、教師の構え

教育は、教師と子どもの心と心のふれあいによってこそ、大きな効果を現わします。学校教育は知識だけを伝達するだけでなく、子どもの人間形成に大きな役割を持っています。友だち同士の心のふれあい、教師との心のふれあい、それによって子どもは成長していきます。

まして、教会学校教育にとって、子どもとの心のふれあいがなくては、全くその役を果たしません。聖書の知識を教え込んだって、救いにはなりません。教師が救われ、きよめられ、聖霊の満たしを得てこそ、子どもたちにキリストを示し、救いを得させることが出来るのです。怒りつばなしの短気な教師、不満ばかり述べる教師では子どもたちにキリストを示し、救いを得させることができないばかりか、栄光を汚すことになります。

この項は筆者自身が準備している時に示されたことを書いています。言い過ぎだと思う時もあるかもしれませんが、私自身の不十分さですので、祈りをもってお読みください。

六、展開

これも話を進めていく時の一つの例です。子どもの実態。準備の都合上いろいろ変わる必要があると思いますが、だいたい導入、提示、結論の順に書いてあります。

子どもたちの身近なところから導入し、聖書の内容を提示し、私たちの信仰生活に生かすという形態をとっています。しかし、内容上、このようにいかない時もあります。①、②、③、…の下のはじめの文は、この時に押さえるなければならない内容です。そして、その後これを押さえるための方法と

また、注意すべきこと、質問などを書き加えています。方法はもつと他にもいろいろあります。子どもの実態に合うものをいろいろと考えてください。

七、まとめの問題

分級が終ればまとめの問題を提出し、子どもたちの今日の分級についての感想を書かせます。

A4の用紙を半分に切り、前もつてものまとめの問題を書いておいて。分級が終れば、子どもたちに自由に書かせます。初めのうちはあまり書けない子どもたちでも、続けていくうちに子どもたちはいろいろなことを書いてくれます。

よく書くようにさせるための秘訣は、子どもたちから提出していただいた感想を読み、教師が赤ペンで返事を書いてやることです。たとえ何も書かなかった子どもにも、祈りを込めて教師の願いを書いてください。

それと同時に、教師自身は子どもがなぜ何も書けなかったのか、この事実をよく反省をしてみてください。分級での中心点がばやけるとだめです。

次週に子どもたちに返してください。それをまとめてファイルしておくようにします。

最後に

分級の教案を書くことは難しいかもしれませんが。しかしお話を準備する時に、ただ聖書の箇所のお話だけでなく、このお話をどのように伝えるかが一番大切です。幼稚科ならば幼稚科なりの分級が必要でしょう。一週間前から折り備えていくようにされることでしょう。その時にこの分級の考え方を頭に入れて準備をしてください。何度か試みていくうちに先生なりの体系が生れて来ます。

少年ダビデはゴリアテを倒すときに、「なめらかな石五個を選び」（サムエル上17・40）とあります。ダビデにとつて必要な石は一個でよかったのです。でも準備は五個しました。どうか、準備は十分にして、子どもの前に立ちましょう。しかし、準備したものをすべて語る必要はありません。子どもの様子を見て、信仰をもつて語りましょう。

聖書 ダニエル1・8・16 テーマ 世の汚れに染まらず

序論

(高橋頼男)

ユダの王エホヤキムの治世に、バビロン王ネブカデネザルがエルサレムを攻め、神の宮を荒らしました。また、ネブカデネザルは、ユダの高貴な出で、優れて有能な若者たちを、王の下で仕える官吏として登用するため、バビロンに連れ行きました。その中に、ダニエル、ハナニヤ、ミシャエル、アザリヤの四青年がいました。彼らは三年間、バビロンの国を支える官吏として王の保護のもとに養いと訓練を受けることになりました。そのため彼らは改名を余儀なくされ、バビロンの言語、文化、習慣に馴染んでその民の一員となること、すなわち文化的、宗教的同化を求められました。これは、彼らにとって厳しい信仰の闘いを強いることになったのです。

一、四青年の信仰

彼らは国が傾き不信仰と反逆によってもはや滅ぶほかに祖国において、ヨシア王の宗教改革や、エレミヤの預言によって、少なからず信仰に影響を受けていたと思われるま

す。神を畏れ、純粹で熱心な信仰を持っていました。しかも、若い(十代の半ば)うちにそのような信仰が育つていたので。彼らは捕囚の身として異邦の地に連れて行かれ、孤独と屈辱を受けながら、異教国の現実の中にしっかりと留まり神の取り扱いを受け、神を仰いで勝利していくのです。

今、どこの教会でも子どもたちや若者たちが少ないことが課題となっていますが、少数でも子どもたちがいることは素晴らしいことです。彼らが不信と汚れ、偶像礼拝が支配する混沌としたこの世にあって、真に神を畏れる者となり、勇氣と情熱を持つ神のしもべとして育っていくなら、教会には大いなる可能性があります。若い日にみ言葉が打ち込まれ、愛と祈りの育みの中で彼らがしっかりと養われることができるよう教会全体で取り組んでいきたいものです。

二、食物で自分を汚さないよう求める

彼らは王の食卓から出る食物で養われていましたが、王の食卓の食物を食べることによって身が汚れることを避けるため(あるいは世俗の雰囲気汚されないように)、水と野菜だけを求めました。世話係の宦官の長は、野菜だけの食物で体が健やかに維持できれば自分が王からとがめ

を受けると心配しましたが、彼らは自分たちに好意を示す宦官の長や家令の立場を理解しつつ、決して妥協しませんでした。そして二週間の期限を設け、野菜だけを食べることににより健康がそこなわれるかどうか、試して欲しいと提案しました。彼らは、このことに関して神が必ず道を開いてくださることを信じました。

彼らはバビロンの異教世界のすべてを拒絶したのではありません。彼らの名が、偶像の神々にちなむ名に変えられたとき、彼らはそれを受け入れました。それは、決して好ましいことではなかったのですが、彼らがバビロンの異教の世界の中で生きていくために必要なこととしてあえて受け入れたのです。しかし、彼らは王の食卓から出る食物については、これを食べることにいて身が汚れると判断しました。そして、これを拒み、それに代わる方法として水と野菜を食することを申し入れたのでした。

私たちもまた、異教社会にあつて偶像礼拝が当たり前に行われ、宗教文化への同意が当然のように求められますが、その風習、文化、習慣の本質をよく理解した上で、受け入れるべきものと拒むべきものとをみ言葉によって精査し、祈りをもって判別すべきでしょう。また、知恵が与えられ

良い解決策が与えられるよう求めましょう。あれが、これが身を汚すかもしれないいつも恐れを抱きながら生活するのではなく、判断したすべてのことについて信仰によって大胆に生きるべきです。

二週間たったとき、彼らは誰よりも血色がよく、健康であることが証明されました。それで、彼らは、王の食卓から下るもので身を汚すことなく、水と野菜を食して生活することができました。

この世において、神の前にきよく生きるとは至難のわざです。しかし、ダニエルは神を現実の生活の中に体験し、生ける神への礼拝と信仰を生活の中心におきながら、取り巻く現実を受け入れ、かつ、きよく汚れない生き方を全うし、その時代と環境の中で神と人に仕えていったのです。

結論

ダニエルは、クロス王の元年まで、約70年にわたりバビロン、メド・ペルシャの王に仕えました(21)。

一人の神のしもべが、歴史の主権者である神への信仰を貫き、その時代環境の中で、きよく真実に生き抜いたことは、私たちにとって大きな励ましです。この時代にあつて神の前にきよく生きましょう。

研究資料

(金井由嗣)

ダニエル書の歴史性と統一性

ダニエル書はバビロン捕囚期及びその直後の支配者の宮廷において唯一の神への信仰を貫いたユダヤ人の生き様を描いているが、そこに登場する人名や出来事が他の歴史書と一致しない場合が多い。またヘブル語正典では「預言者」ではなく「諸文書」に組み入れられている。そのため、批評的な立場に立つ学者や注解者には、本書を紀元前2世紀のマカベア時代に創作されたものと見なし、その歴史性に信頼を置かない人が多い。また古い伝承に後からの創作や編集が加わった文書と考える人も多い。しかし本書の著作時期の古さや統一性を支持する見解にも強力な根拠があり、その場合他の歴史書との食い違いはむしろ本書に独立した歴史の証言としての価値を認める要因となる。とりわけ本書でバビロン最後の王とされているベルシャザル(王ナボニドスの息子で、父王が遠征で留守のバビロンを統治した摂政)について、バビロン出土の粘土板文書が他の歴史書ではなくダニエル書の記述と一致したことは、ダニエル書が著者の正確な知識に基づいた同時代の証言であるこ

とを示している(以上の議論については、ボールドウィン「緒論」を参照)。

文学類型、言語、構造、中心思想

本書には、知恵物語、預言、黙示の要素が同居している。旧約諸文書においてこの三要素は互いに密接に関係していた。本書の冒頭(2・4前半まで)と末尾(8章以降)はヘブル語、中間はアラム語で書かれている。この構成はよく考え抜かれたものであり、本書は全体にわたってよく練られた構造を示している。その中心メッセージは、地上の権力の興亡とそれに伴う暴力にもかかわらず神は歴史の主権者であり続け、神の民は苦難を通らされるが最後には主の勝利に連なる者とされる、ということである。

テキスト

8 王の食物と、王の飲む酒とをもって、自分を汚すまいと バビロニア王の宮廷で食べる「ごちそう」(特殊な用語)は美味ではあっても旧約律法の規定からは遠かった。しかし「酒」(ワイン)に関しては、特に律法に違反する心配はない。律法上の汚れ以上に、ここでは宮廷の宴席に連なることが王権への精神的服従を意味することが問題であった(11・26「彼の食物を食べる者たち」がこの単語のもう一つ

の使用例である)。古代オリエントを代表する叙事詩「ギルガメシュ物語」には、野獣と共に生きる強者がごちそうを食べ酒を飲むことで野性を失い懐柔される場面がある。「カルデヤびとの文学と言語とを学ばせ」(4)ることと合わせた文化的同化の手段である。ダニエルたちは職業のための学習は受け入れたが、全存在を王の支配下に置くことは拒否したのである。異教の神々の名前を含む改名を抵抗なく受け入れた(7)彼らが、飲食には断固とした態度を取ったことに注意すべきである。人間的な快楽が精神的支配の道具となり得ることを、心に刻んでおく必要がある。

宦官の長 古代の王制において、宦官(去勢者)が王者の身の回りの世話や子どもの養育者になることは一般的だった。子どもに詳しく説明する必要があるが、「王様の身の回りの世話をする役目の人」との説明があっても良いかもしれない。

9 恵みとあわれみ 恵み(Ⓔへセド、「いつくしみ」とも訳される)は契約に基づく神の変わらない真実な態度。あわれみ(Ⓔラハーミーム)は肉親など親しいものに向けられる深い愛情を表す言葉である。この二つはしばしばセットで現れる。主はイスラエルにいつくしみとあわれみを注

ぎ続け(イザヤ63・7)、イスラエルは主のいつくしみとあわれみを賛美した(詩篇103・4、8)。しかしイスラエルが主に背き続けた結果、主はイスラエルからいつくしみとあわれみを取り去られた(エレミヤ16・5)。その結果がバビロン捕囚である。しかし、ダニエルたちのように主に真実に従う者には主は変わらないうつくしみとあわれみをもって接して下さる。そのような信仰と悔い改めが神の民全体に及んだ時、再び主のいつくしみとあわれみが民を集め、国を回復されるのである(イザヤ54・7)。

11 家令 アッカド語(アッシリアやバビロニアの言語)で「世話役」(新改訳)。ダニエルたちの世話をするために付けられた直接の担当者。

参考図書 J. G. ボールドウィン(ティンデル)、W. S. タウナー(現代聖書注解)、千田次郎(新聖書講解シリーズ)、『古代オリエント集』、Theological Wordbook of the Old Testament, Jenni = Westermann, Theologisches Handwoerterbuch zum Alten Testament.

聖書

ダニエル・8〜16

タイトル

自分を汚しちやダメ!

暗唱聖句

自分を汚すまいと、心に思い定めた。

ダニエル・8

目標

汚れに満ちた世にあつて、きよい生き方を守る。

導入

(和田 治)

小4のえみちゃんのクラスで、すぐ流行っているものがあります。それはなんと、「星占い」なんです。人気のテレビ番組で、おひつじ座やさそり座や、自分の星座で一日を占うのですね。でも、えみちゃんは、お友達から誘われても、絶対に占いをしません。占いは神様が禁じておられる汚れたことだからです。教会学校の生徒のえみちゃんは、「神様が喜ばれないことをして自分を汚すまい!」って心に決めているのです。周りがやっていることを、自分だけ「やらない!」って拒むことは、簡単じゃありませんよね。今日の箇所は、「周りがどんなに汚れていても、自分を汚さずよく生きるんだ!」って心に決めて、周りに流されずに神様に従い通した人たちのお話なんです。

ダニエルたちの決心

今から2千5百年以上前、南ユダ王国はバビロンという国に打ち負かされ、ユダの人々はむりやり外国に連れて行かれたのです。バビロンの人々は、自分たちの手で作った偽の神々の偶像を、みんなで礼拝し、汚れたことをしていました。

バビロンの王ネブカデネザルの命令で、ユダの人々の中から、特別に知恵があり、役に立ちそうな優れた若者たちが選ばれました。王は彼らに、バビロンの言葉を勉強させ、色々な訓練を施すように命じました。それだけではありません。王の食べるごちそうを毎日たっぷり食べさせ、3年間も元気に生活して、それからバビロンの国にしっかりと仕えるように準備しようとしたのです。

選ばれた若者たちの中に、ユダ族のダニエル、ハナニヤ、ミシャエル、アザリヤがいました。彼らは、「うわあ、うれしいな! 王様の食べるごちそうを毎日いただけるなんて、ラッキー!」って喜んでしょうか? いいえ。実は、バビロンの王様の食べ物の中には、神様が「これは汚れているから食べてはなりません」と禁じておられたものが含まれていたのです。ダニエルたちは決心しました。「僕たちはきよい神様に従うんだ。王様のごちそうによって自分を汚すわけにはいかない!」

守られたダニエルたち

そこでダニエルたちは、世話係の役人に、野菜だけ食べさせてもらえるようにお願いしました。でも、簡単には行きません。「他の若者と比べて、あなたがたの顔が青白く、やせ細ってしまったら、どうなるだろう。私がちゃんと世話をしていないとお叱りを受け、首になるかもしれない」。そこで、ダニエルは言いました。「どうぞ、僕たちを十日の間ためしてください。ただ野菜だけを与えて食べさせ、僕たちの顔色と、王のごちそうを食べる若者の顔色とをくらべた上で、野菜だけの食事を続けたら大丈夫かどうかを決めてください!」

さて、十日が過ぎました。あれれ? 不思議です! ダニエルたち四人の顔色は、王のごちそうを食べた若者たちよりも美しく、肉付きも良く、ずっとたくましいではありませんか! 神様の恵みですね、ハレルヤ! そこで、役人はダニエルたちに野菜だけを食べさせることに決めました。こうして、彼らは王様のごちそうで汚されることなく、きよく生きる生き方を貫くことができたのです。

きよい生き方を守ろう!

今は、何かの食べ物を食べたなら汚れる、ということはありません。でも、実は私たちを汚すものが案外身近にあるのではありません。

いでしょうか。たとえば、「〇〇君、一緒に××神社にお参りに行ってお守りを買おうよ!」とか「〇〇さん、あそこの古いコーナ―、すごくよく当たるって評判だからみんなで行くんだけど、一緒に行くでしょ?」と誘われた時、どうしますか? 「おい、今日、用事が出来たって嘘をついて、ブル掃除をさぼって遊びに行こうぜ!」、「ここの本屋さんで万引きするから、見張つとけ!」、「〇〇ちゃん、うざいから、明日からみんなで『しかな本、みんなで読もうぜ、えへへ』」などなど、きよい神様がお怒りになる汚れたことが、皆さんのすぐそばで起こるかもしれません。ダニエルたちのように、「神様の子どもらしく、きよく歩むんだ。自分を汚すまい!」って決心できていますか?

神様の恵みによって

私たちの力では、自分を汚さないように守ることはできません。でも、神様は「きよく歩みたいんです、助けて下さい!」って祈る心をお喜びくださり、「自分を汚すまい!」との決心を祝してください。さあ、どんなに周りが汚れていても、神様の恵みによって、きよく歩み続けよう!

♪心が守られるように♪

(GS 24)

聖書 ダニエル6・1～24 テーマ 神礼拝を貫く

序論

(高橋頼男)

国の法律に反して、神への祈りをやめなかったダニエルは、ついにししの穴に投げ込まれました。しかし神は、ししの口からダニエルを守られました。神の守りとは、どのような人に与えられるのでしょうか。

一、神の御前に祈る人(10)

ダニエルは、彼を妬む者たちが策略をめぐらせた文書に王が署名したことを知っていました。それにもかかわらず、自分の家に帰り、エルサレムに向かって開かれた屋上の窓もそのままに、〈以前からおこなっていたように、一日に三度ずつ、ひざをかがめて神の前に祈り、かつ感謝した〉のです。

すべてのことを知りつつ、あえていつもと同じように、信仰の良心に従って祈りをささげました。揺るぎない確立された神の御前の生活を、日々生きる聖徒の姿に、私たちは驚きと感動を禁じ得ません。何と力強い堅固な信仰でしょうか。ことあるごとに恐れ、迷い、信仰が揺れてしまう私たちにとって眩いばかりです。

ダニエルの祝福された人生の秘訣は、神礼拝と祈りを第一とする生きかたを貫き通したことです。それは、どんな時、どんな状況の中でも揺るがずぶれず、変わらなかつたのです。

今日、私たちもダニエルのように、私たちの祈りと礼拝生活において、神第一を貫く決意をする必要はないでしょうか。世の激しい逆流に立ち向かい、偶像礼拝が支配する霊的暗闇の世にあつて、揺るがぬ信仰を確保し、キリストの証人としての生活を自由、大胆に生きるためです。

二、神の前に正しくきよい人(22)

ダニエルは、王の前に、自分が神の御介入による奇跡によってししの穴から助け出された理由を説明して言いました。〈これはわたしに罪のないことが、神の前に認められたからです。王よ、わたしはあなたの前にも、何も悪い事をしなかつたのです〉と…。

ダニエルは、神の前に罪を犯さず正しい清い生き方をしました。さらに、人の前にも誠実であり、忠実な働きをなし、彼の生活には公私において何の裏表もありませんでした。ですから、彼の敵でさえも、彼の内には何らの不正も怠慢も欠点も見つけ出すことが出来なかつたのです。

しかし、正しく清い生き方がこの世の人々に必ずしも受け

入れられるわけではありません。むしろ、ダニエルのように煙たがられ、あらぬ批判を受け、憎まれ、迫害を受けるのがこの世の常です。

人となられた主イエスの地上の歩みはまさしくそのとおりでした。私たちもクリスチャンとして神の前に人の前に清く真実に生きることを恐れてはなりません。そして、この世において誤解され、批判され、憎まれることをも覚悟しなければなりません。いえ、そこにこそ私たちの使命があるのです。義のために迫害されるものこそが、地の塩、世の光となるのですから（マタイ5・10～16）。

三、神に信頼する人（23）

ダニエルがししの穴から出された時、その身に何の害も受けていませんでした。〈これは彼が自分の神を頼みとしていたから〉とあります。これは、ダニエルがかなり高齢になっていた時の出来事です。若き日に、バビロンに捕囚として連れて来られた時から約七十年、終始一貫、主に信頼し続けてきたダニエルの信仰の姿がそこにあります。

ダニエルは、異邦の国、偶像崇拜の民の中で、奴隷の民として生きて来ました。人がどう思い何と言おうが、世間がどういう態度をとろうが、自分が信頼する神の御前に忠実に生き

ました。それが、異邦社会における彼の処し方でした。そのため、どんな迫害や苦しみを受けるかは、ダニエルにとって全く問題ではありません。ダニエルの神への深い信頼、ひたすら神に仕える忠実な信仰の生き方は、全く揺るぐことがなかったのです。

ダリヨス王は〈生ける神のしもべダニエルよ、あなたが常に仕えている神はあなたを救って、ししの害を免れさせることができたか〉と言っています。王は、ダニエルの信仰を通して、そば近く仕えるダニエルが礼拝している神、彼が信頼する神こそが、真の神、全能の神であることに気づいていたのです。

この出来事は、神に信頼する者に与えられる試練が、かえって周囲にどんなに大きな恵みの機会となるかを教えています。

結論

偶像の国バビロンにおいて、政治の中枢にあつて生きたダニエルの信仰と生活は、異教社会の日本に生きる私たちにとって、確かな示唆と大きな励ましを与えます。揺るぐことのない一貫した祈りと神礼拝、神と人の前に清い誠実な生き方の秘訣は、彼の神に対する絶大な信頼にあったのです。

研究資料

(中島啓一)

この箇所のメッセージは、神により頼む者は、必ず現実の死のわなから守られるということではない（現実には、教会の歴史を通して多くの殉教者がいる）。大切なことは、自分の望むとおりにことが進むことではなく、神を中心とする見地に立つて生きることである。死から解放されるか、そうでないのか、それは神の御手の中にあることであって、いずれを通してでも、神の栄光があらわされ、神の計画が前進することが重要なのである。

この書の最終章では「その時…あの書に名をしるされた者は皆救われます」（12・1）と、究極の救いの約束がなされている。ししの穴からのダニエルの救いは、その来るべき究極の「死の穴」からの救いを先取りし、約束するものと言えよう。

テキスト

1〜3 王は彼を立てて全国を治めさせようとした 王はダニエルを、総督たちとはもとより、他の二人の総監よりも勝る立場に抜擢した。それが他の総監・総督たちのねたみを買うこととなった。

4〜5 ダニエルの神の律法に関して、彼を訴える口実を得る

のでなければ、ついに彼を訴えることはできまい 敵対者たちがダニエルを陥れるためには、その信仰心を利用するしかなかった。

6〜9 今から三十日の間は、ただあなたにのみ願ひ事をさせ：王への敬意は表面だけで、実際はダニエルを陥れるという己の欲望のために王の權威を悪用するものであった。けれども敵もさる者、ダニエルが、王に背く／背教するのいずれを選んでも、窮地に追いやられ、敵対者の勝利のように思われる巧妙な法案であった。

10 署名された 不正な方法（ダニエルを排除しての建議）で提出された法案であっても、王が署名したならば有効であることを、ダニエルは知っていた。二階のへやの窓の開かれた所で 祈りがもてはやされるときには隠れて祈るべきであるが（マタイ6・6）、禁令のもとで隠れて祈るなら、神よりも世の権力を恐れることになる。以前からおこなっていたように よってダニエルは以前からの祈りの習慣を変えなかった。一日に三度ずつ、ひざをかがめて神の前に祈り 朝と夕の一日二回、立つて祈るのが一般的であった（歴代上23・30）。ダニエルが二回ではなく三回、立つてでなくひざまずいて祈ったことは、特別な厳肅さ、祈りの必要性、そして謙遜（けんそん）を示すのだろう（列王上8・

54、エズラ9・5)。感謝した「夕べに、あしたに、真昼に」(詩篇55・17)と、日に三度祈った詩人は「主はわたしがたたかう戦いからわたしを安らかに救い出されます」(詩篇55・18)と信頼を告白した。ダニエルの、祈りに続く感謝は、それと同種の信頼を表すのだろう。

12 ししの穴 狩猟のときに(おそらく獲物として)放つために、ライオンを飼育していたのであろう。ペルシャ時代については記録がないが、少し前の時代のアッシリヤでは猛獣の檻に犯罪者を入れる公開処刑があったことが知られている。

14 王は…大いに憂え 王は総監たちの策謀を知って憤り、彼らに見事に操られてしまった自らを恥じ、意図せざることはいえ、信頼するダニエルを窮地に追いやってしまったことを嘆いた。

15 変えることのできないもの 王といえども法を曲げることではない。それは、社会秩序の根底からの崩壊につながることでからである。

16 どうか、あなたの常に仕える神が、あなたを救われるようにダニエルを救いたい一心で、王が願ったのは、ダニエルが仕える神に対してであった。王以外への願いを禁ずる法律に、王自らが違反していることになる。私的、内面的なことを

禁ずる点で、そもそも無理のある法律であった。

17 これを封印した 受刑者に他者の助けを届けさせないための措置だが、救いが神によるものであることを明白にする役目も果たすことになる。

18 その夜は食をとらず… 王は、自分の愚かさを悔い、わらにもすがる思いで祈ったのだらう。

19 朝まだき起きて… 拷問に朝まで耐えた囚人を赦免する慣習がバビロンにあったようで、それがダリウスの世にも続いていた可能性は高い。彼が夜明けを待ちわびたのはそのためだろうか。

20 生ける神のしもべ…神はあなたを救って…免れさせることができたか 「生ける神」という表現に、すでにこの問いに対する答えがある。すなわち、生ける神ならば彼を救うことができるし、救えないならば生ける神ではないのである。

22 わたしの神はその使をおくって… 三人の友人たちの場合(3・25)と同様に、神は試練のただ中に助け手を送って、ダニエルを守られた。

参考図書 注解書 J. E. Goldingay (Word), W. S. Towner (Interpretation), 山口昇 (新聖書注解) その他 The IVP Bible Background Commentary: OT

聖書

ダニエル6・1〜24

タイトル

神様が一番！ どんなときにも…！

暗唱聖句

わたしの神はその使をおくつて、ししの口を閉ざされた。
ダニエル6・21

目標

圧迫や迫害の中でも神への礼拝を貫く者となる。

導入

(和田 治)

みんなは今までに、「神様を信じて、本当に良かった〜」って思ったことはありませんか？ 神様がお祈りに答えて下さった時には、そう思いやすいですよ。でも、神様を一番にしているためにいやな目に遭ったり、損をしたり、辛いことが続いたりすると、どうでしょうか？ それでも神様を一番に、心から礼拝できるかな？ 今日、先週登場したダニエルが、恐ろしい目に遭いながらも、神さまを一番にして礼拝を貫いた時のお話です。

神様を一番にしたダニエル

「おのれ〜ダニエルめ…！」バビロンの王ダリヨスのもとで働く役人たちは、ダニエルが憎くてたまりません。だって、王様の命令で、ダニエルが王様の次に偉い立場になったのですから。「奴隷のくせに生意気な！ なんとかしてひきずりおろしてやる！」。

でも、神様を信じるダニエルはきよく正しい人でしたので、どんなに粗さがしをしてもむだでした。そこで彼らは、王様をそのかして新しい法律を作ったのです。「これから三十日間、王様以外のどんな神にも人にも祈りをささげる者があれば、ライオンの穴に投げ込むこと！」

ダニエルは、そのとんでもない法律が定まったことを知って、家に帰りました。一日に三度ずつ、ひざをかがめて心からの祈りを、毎日欠かさず神様にささげてきたダニエル。でも、今度そんなことをすれば、新しいその法律を破ることになり、ライオンの穴に投げ込まれます。生き残るには、神様への礼拝をやめるしかないように思えます。

ところが、驚いたことに彼は、これまでと同じように、エルサレムに向かって窓の開かれたところで、神様へのお祈りをささげ、礼拝を貫いたのです！ どうしてそんなことができたのでしょうか。それは、ダニエルにとって、人間の作った法律に従うことよりも、神様に従うことが大切だったからです。法律やルールは大切ですが、もし神様に従うことと反対ならば、その法律よりも神様に従う方が大切ですよ。ダニエルは命をかけて「神様が一番！」という思いを貫いて、神様を礼拝し続けたのです。

ライオンの穴に投げ込まれたダニエル

「しめしめ、思い通りだ！」さっそく役人たちは王様のもとに来ました。「王様！ ダニエルが法律をやぶり、一日に三度ずつお祈りしておりますぞ！」さあ大変！ 王様は心配でたまりません。だって、王様はダニエルのことをとても深く信頼しているのですから。何とかダニエルを救うことができないだろうか、あれこれ考えましたが、いったん決まった法律は王様でも変えることができません…。とうとうダニエルは、ライオンでいっぱい穴に投げ込まれてしまったのです。

「ダニエルー！ どうか、あなたがいつもお祈りしている神様が、あなたをお救いくださるように！」王様はそう叫んで、宮殿に帰って行きました。ダニエルのことが心配で、食事ものどを通りません。夜も全く眠れませんでした…。

神様に守られたダニエル

朝早く、王様はライオンの穴に向かいました。そして、悲しそうな声で呼びかけます。「ダニエルよう！ あなたの神様はあなたをライオンから救ってくれたか？」すると、人の声が！ 「王様々！ 私の神様は私をライオンからお守りくださいましたよー！」ダニエルです！ さすが神様！ ダニエルは神様にしっかりと守られ、けが一つありません！

「神様が一番！ たとえどんなことがあっても…」。そんな思いで神様を礼拝し続けてきたダニエルを、神様は守ってくださいましたのです。

実は、神様に従い、神様を信じているために、ひどい目にあったり、苦しめられたり、中には殺されてしまった人も世界中にたくさんいるのですね。その人たちは神様から見捨てられたのでしょうか？ そうではありません。その人たちの魂を、神様は御手に抱き、この地上のどんな場所とも比べることができないほど素晴らしい「天国」で、豊かな祝福でいっぱいに満たしてくださいます！ やがて「良くやった！ 忠実な愛する私のしもべ。ここであなただけが受ける報いは大きい」って神様に抱かれる日が来るのですね！

結び

神様を礼拝すればいじめられる、損をする、辛い目に遭う…、たとえそんな時でも神様が一番ですよね。そう、ダニエルのように！ 神様は、信じる私たちがどんな時でも神様を一番にできるよう、勇気と力をくださいます。そしてそんな信仰をお喜びくださり、豊かに祝福してくださいます！ だから、心から「神様、あなたが一番です！」って、神様を礼拝し続けましょう！

♪イエスさまがいちばん♪

(ホ68、イン7)

聖書 エステル4・1～17 テーマ 命がけの決断

序論

(高橋頼男)

エステル記は、ペルシヤ王アハシユエロス(クセルクセス)の時代に首都ササの王宮においてユダヤ人の娘である王妃エステルが活躍した物語です。ユダヤ人の祭りである「プリムの祭り」の際に読まれ、その起源を説明するもので、エステルが王妃に選ばれるいきさつ、ハマンの陰謀とエステルの命がけの活躍、ユダヤ人の救いと敵ハマンの滅亡が記されています。

一、王妃に選ばれたエステルの使命

王宮では政治の外に置かれていたエステルに対してモルデカイは、ハマンによって計画された民族絶滅の危機が迫っていることを告げました。そして、このような時こそエステルが王妃の立場を用いて命を懸けた働きをなすべきであることを語って諭します。〈あなたがこの国に迎えられたのは、このような時のためでなかったとだれが知りましょう〉。

神は、モルデカイもエステルも願ったわけではないのに全てのことを働かせ、国中から集められた美女たちの中から特別にエステルを選び、王妃となる栄冠を得させられました。

そして、エステルは王宮に住み、思いもしなかった特権と名誉を得たのです。それは何という光栄と祝福でしょうか。しかし、そこには、神の意図(ご計画)があることを忘れてはなりません。自分の喜びや名誉のためにそのような祝福を受けたではありません。神は無目的に人を選ばれることはありません。神の選びや祝福には、必ず神の大きなご計画と期待が秘められているのです。その大いなる務めのためにこそ、彼女は思いがけない榮譽を受け王妃にまで引き上げられたのです。神は、この時のために、すなわち、民族撲滅の危機からご自分の民を救うために、エステルを備えておられたのです。

私たちに与えられている世や社会における立場や榮譽は、私たちの自己目的の人生や満足のためではなく、神が期待しておられる使命を果たし、奉仕する機会であることを忘れてはなりません。

二、エステルの決断

神のご計画と導きに対して、人の側での信仰と従順の応答がなされなければなりません。そして、その従順は時には命を懸けるほどのものです。

エステルは何としても、至急、王の前に出て嘆願しなければ

ばならないと思いました。しかし、王の好意を受けていたエステルではありませんが、もう一カ月も王の招きはなく、自分から王の前に出ることは許されていなかったのです。王の身が守られるため、だれも王の招きなく近づくことは出来ませんでした。勝手に近づく者は身分立場を問わず死刑になるという法律がありました。ただし、王が笏をのべる者には命が守られ近づくことが許されるのです。そこでエステルは決断をしました。三日の断食を依頼し、神が王の心を動かしてくださるようにと祈りを求めました。そして、自らは「わたしはもし死なねばならないのなら、死にます」と、自分の命を神のみ心に全く委ね、その結果がどうであろうと従う決心をしたのです。

三、ユダヤ人の救い

この結果、ユダヤ人撲滅というハマンの計略は失敗し、ハマン自身が自分の立てた計略によって失脚し命を失うことになりました。王は、新しい勅令を出してユダヤ人に対する恩恵を施し、その命と財産を守るようにしたのです。その結果、敵は滅ぼされ、ユダヤ人は驚くべき勝利を収めることができました。

神は、神を知らない人々や異教社会にあつて、人間の政治、

社会、個人の生活の中にもまでも働かれ、摂理をもって神のご計画を進められています。そして、神のご計画に従って忠実に、信仰によって応答し、神のためには身をささげて真剣に応答する人を用いてみ心をこの世に成し遂げられるのです。「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている」(ローマ8・28)。

この書には、神の名が一度も出てきません。しかし、確かに神は生きて働かれ、神の民を敵の恐ろしい計略と力から守り、見事に敵を打ち破ってくださいました。神はこの地(異教国、偶像崇拜、神を知らない人々の社会、支配)にある神の民(クリスチャン)に対して、大きな憐れみと見えない摂理の手をもって悪しき者の手と試みから守り救ってくださいなのです。この世の権力と支配の現実の中で、神が見えず神がわからなくなるようなことがあります。しかし、神はご計画のうちにそのみ心を成し遂げ、見えない摂理の御手をもって働いておられるのです。

結論

神を信じて熱心に応答し、委ねられた神からの使命に身をささげいく者となりましょう。

研究資料

(小平徳行)

エステル記はエズラ記、ネヘミヤ記と同様、バビロン捕囚帰還後の歴史を背景としている。バビロンを滅ぼしたペルシャ王クロスは、BC 539年に勅令を出しユダヤ人を故国に帰るように促した。しかし帰還した民はわずかで、大部分はペルシャに残留した。本書の記事はゼルバベルが第一部隊を率いて帰国し、神殿再建を果たした第一期(エズラ1(6章)とBC 458年のエズラ帰還の第二期(エズラ7(10章)の中間に起こった出来事を記している。この時の王はアハシユエロス(クセルクセス)、舞台はペルシャの首都ササである。このときペルシャにいるユダヤ人は、ハマンによって計画された民族根絶の危機にさらされていた。しかし、この異邦の地に残留している神の民に対して、神は大きなあわれみを注ぎ、見えない摂理の御手をもって神の民を悪しき者の手から救われたのである。本書の特徴は、神の名が一度も出て来ないことである。人間の政治的、社会的、個人的な活動の中に神が摂理的に働かれて、神のご計画が必ず実現していく事を教えられる。しかし同時に、エステルやモルデカイが自分たちの置かれた場所において忠

実に神の召しに信仰によって応答し、己を捨て、神のみこころに身をささげて、神の民と民の栄光のために生きたところに神のご計画が実現したことを覚えるべきである。

テキスト

1(3) 衣を裂き、荒布をまとい、灰をかぶり これらは悲しみを表わす行為であり、イスラエルだけでなく広く古代オリエントで行われていた(イザヤ15・3、ヨナ3・5、6等)。各州のユダヤ人もモルデカイと同様の反応を示している。彼らはただ悲しんだだけではない。本書は宗教的行為を表面に出していないが、断食を含めたこれらの行動で神への悔い改めと嘆願の祈りを暗示している。

4 エステルは政治の動きの外に置かれていたためモルデカイの悲しみの理由を知らなかった。受けなかった モルデカイが着物を受け取らなかったのは、彼の悲しみが容易になだめられるものではなく、なお祈り続ける必要を感じていたからであらう。

11 すべて召されないのに内庭にはいつて王のもとへ行く者は、必ず殺されなければならない この法律は王の生命を守るため、またささいな問題で王を悩ますことがないために定められ、勝手に近づく者は身分を問わず死刑となっ

た。したがって王がエステルを招くのでなければ、王のところに行くことはできなかった。ここまで一ヶ月間エステルは王から招かれておらず、王に嘆願するのは困難な状況であった。笏 王の権威を表わす杖。

13〜14 モルデカイはこの危機的状況から救われるために、エステルを懸命に説得した。あなたは王宮にいるゆえに難を免れるだろうと思ってはならない エステルもユダヤ人虐殺の命令の対象外ではない。ほかの所から モルデカイはエステルが事を起こさなかったとしても神はエステル以外の方法を用いてユダヤ人を助けてくださると信じていた。それは神の民に対する約束を信じる信仰から来ている。あなたとあなたの父の家とは滅びるでしょう 神の召しへの不従順は自らとその家の滅びを刈り取ることになるという警告。あなたがこの国に迎えられたのは、このような時のためでなかったとだれが知りましょう モルデカイはエステルの生命をかけた働きこそ神の御旨であると確信していた。ゆえに与えられた立場を最大限に用いるようエステルを励ました。これは神の摂理に対する信仰である。モルデカイもエステルもすんで王妃を目指したわけではなかったが、全ての状況が働いて彼女は王妃となった。こ

れは今回の危機のために神が人の思いを超えてあらかじめ準備されていたのである。

15〜16 三日のあいだ 通常、断食は一日のみであったので、この要請は、この責務が非常に重大であることを認識していたことを表わしている。これはとりなしの祈りの依頼である。王の心を動かすのは自分ではなく神であると信じていた。わたしがもし、死なねばならないのなら、死にます これはあきらめではなく自分の生命を神のみこころに完全にゆだねて、自らを明け渡して従う決意を表わしている。

この結果、ハマンを失脚させることに成功し(5〜7章)、王は新しい勅令を出してユダヤ人自らの手でのちと財産を守るようにし、ユダヤ人は勝利を収めることができたのである(8〜9章)。

参考図書 鈴木昌「エステル記」『実用聖書註解』、工藤弘雄『新聖書講解・エステル記』(以上いのちのことば社)、C・E・デマレイ「エステル記」『ウェスレアン聖書注解・旧約篇2』(イムマヌエル綜合伝道団) 他

聖書

エステル4・1〜17

タイトル

神様から与えられた使命に生きよう！

暗唱聖句

わたしがもし死なねばならないのなら、死にます。

エステル4・16

目標

神からの使命を命がけて果たす者となる。

導入

(和田 治)

皆さん、「使命」という言葉を知っていますか？ 漢字で「命

を使う」と書きます。与えられたとても大切な務めのことです。

例えば、アンパンマンの使命は、みんなを悪の力から守ること、先生の使命は、教会学校の皆さんに聖書のメッセージを伝えることです。では、あなたにも使命があるのでしょうか？ 実は、あ

るのです！ 神様は私たち一人一人に、使命を与えておられ、それを精一杯果たそうとする人をお喜びくださるのです。今日は、神様から与えられた使命を、命を懸けて果たした、ある美しい女性に注目しましょう！

王妃に選ばれたエステルの使命

その人の名は「エステル」。先週のお話に登場した、バビロンの次に世界をおさめたペルシャの都に住んでいたユダヤ人です。そ

の国の王アハシエロスは、新しい王妃を国中の若い美しい女性の中から選ぶとしました。たった一人、王妃として選ばれた一番素敵な女性、それがエステルだったのです。

ところが、ハマンという悪い家来が、王様をうまくだまし、ペルシャに住むユダヤ人を皆殺しにする命令を国中に出したのです！ 何という恐ろしいことでしょうか！ さあ大変！ 「うううーおおう、なんといいことだああ」。エステルの従兄のモルデカイは、あまりのことに大声で叫びながら、王宮の門の前まで来ました。荒布をまとい、灰をかぶって！ それは、深々い悲しみを表すしぐさだったのです。心配したエステルは、使いをやってモルデカイにわけを聞きました。そこで初めて、自分たちユダヤ人が皆殺しにされようとしていることを知ったのです。モルデカイは、エステルが王の前に出て、ユダヤ人の命を助けてほしいとお願いするよう告げました。

エステルは困りました。どうしたらよいでしょう…。再び使いをやりました。「この国では、お呼びもないのに王宮の内庭に入れば、その場で打ち首なのです。陛下が金の笏を伸べてくだされば別ですが」。この法律は王の命を守るために定められ、勝手に近づく者はどんな身分の人でも死刑だったのです！ 王妃も、王が招いた時しか王に会えませんでした。しかも、これまで一ヶ月

間エステルは王から招かれていなかったのです。今の彼女にとって、王に何かをお願いするのは、死刑になるかもしれないとても危険な事でした。それを知ったモルデカイはこう言いました。「あなたはすべてのユダヤ人から離れて王宮にいるから助かるだろうと考えてはなりません。今、黙っていたら、別の所からきつと助けがあるでしょう。でも、あなたは滅びるに違いありません。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、この時のためであるかもしれないですよ！」

エステルの決断

そこで、エステルは答えました。「あなたは行つて都にいるすべてのユダヤ人を集め、私のために断食して祈つて下さい。私も断食して祈ります。そして私は法律にそむくことですが、王のもとへ行きます。私がもし死なねばならないのなら、死にます」。そうです、エステルは、使命のために命を懸ける決心をしたのです。「私に与えられた使命は、今、王のもとに行つて、ユダヤ人を助けてくれるようにお願いすること。たとえそのために死んでも構わない！」と。

三日目、エステルが王にお願いしようと内庭に入りました。やったーっ！ 王の笏がエステルに伸ばされたではありませんか！ こうして、悪いハマンの立てたユダヤ人皆殺し計画は失敗に終わりました。代わりにハマンが王に処刑されたのです！

私たちの使命

さて、実はこのエステル記には、「神様」という言葉が一度も出てこないんです。ええ？ 聖書なのに？ なんだか不思議ですよ。でも、今日のお話で分かったでしょ？ 王が金の笏をのびしてエステルの願いを聞き入れてくれたのは、神様がエステルやモルデカイの祈りにお応え下さったからだってこと…。いや、そもそも、エステルが王妃に選ばれたのも、ユダヤ人にとっての大ピンチのこの時のために神様が準備して下さったのです。ハレルヤ！

結び

この世界では、「神様がおられるんなら、どうしてこんなひどいことが…」と思うような出来事が起こることがあります。でも、どうか忘れないでください！ 神様は私たちのお祈りに答えて、ご計画の内にそのみこころを成し遂げられるってことを！ そして、神様は求めておられます。「私をお使い下さい。私はあなたのものです！」とエステルのように神様からの使命に命を懸ける人を！ あなたの一度限りの人生は、あなたを愛し、お救い下さった、神様の栄光を現すためにあるのです。あなたの使命はイエス様の素晴らしさを証することなんです！ あなたも、神様のものとして自分自身を献げ、従いましょう！

♪もちいたまえわが主よ♪

(ホ 113)

聖書 ルカ18・1～8 テーマ 失望しないで祈る

序論

(石田高保)

今日の箇所のテーマはルカ自身が記しているので明確です。それは「失望せずに常に祈るべきこと」です。民衆の日常に即したイエス様のたとえば、昔も今も実にわかりやすいものです。

一、失望しやすい現実

「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わぬ裁判官がいた」、思いがけない話の始まりに、聞いていた人は、いったいどんな話になるのかと思わず身を乗り出したことでしょう。弱者にとつては公正な裁判官こそが頼みの綱です。当時のやもめは夫に先立たれただけでなく、自分を扶養してくれる子どもや親族がいらないなら、寄る辺ない最低の生活を強いられることになりました。ところが登場したのは悪代官ならぬ「不義な裁判官」です。この裁判官はこのやもめの訴えを何度も門前払いにしていました。しかし心の中は穏やかではありません。「絶えずやってきてわたしを悩ます」と、やもめをうとましく思っていたことがわかります。このたとえ話を聞いてい

た人たちは義憤に駆られたことでしょう。しかし話の展開は、不義な裁判官がとちめられるという胸のすくような勧善懲悪物ではありません。まさに「人を人とも思わぬ」裁判官ですが、煩わしさから逃れるために、「彼女のようになる裁判をしてやろう」と決断します。これほどひどい裁判官でもしつこく訴え続けるやもめの言い分を聞いてやろうとするなら、なおさら私たちの天の父は私たちのため祈りに応えてくださらないはずがない、という結論です。聞いていた人たちは神の底知れぬ慈愛と祈りに働く神の力に目が開かれたことでしょう。

このような神の約束の一方で私たちの責任も明らかにされます。「イエスは失望せずに常に祈るべきことを：教えられた」ということは、祈りが応えられないために失望しやすいことを示唆しています。一度ならず祈るけれども、途中で失望して祈るのをやめてしまうことが多いという現実を受け止めての言葉です。それでは祈り続けられるためにはどうしたらいいのでしょうか。イエス様は神のご人格に目を向けさせます。当然、不義な裁判官の対極におられる方で、「日夜叫び求める選民のために、正しいさばきをしてくださらずに長い間そのままにしておかれること」の決してない方です。

二、神への信頼による祈り

けれども私たちの中に、イエス様の言われるままの神を受け取っていない人がいるかもしれません。不義な裁判官ほどではないにしても、神はそれほど気前の良い方とは思えなかったり、自分の必要には無関心でいると思ひ込んでいたり、良い行いと交換で祈りに応えろと考えていたり、祈りが足りないから、不信仰だから祈りには応えないと思っではないでしょうか。おおよそ神のイメージは、実の父親のそれとダブリやすいものです。人間の父親は不完全で神のイメージを体現するにはとうてい十分ではありません。ですから神の途方もない気前の良さが受け取りにくいものです。もしそうであるならば、まずその間違ったイメージを取り除きましょう。神は〈選民〉、つまり神を愛する私たちの祈りには無条件で応えたいと願っておられます。祈りが応えられるのはただただ神の恵みであって、私たちの出来不出来には関係ありません。ただ、このやもめのようにしつこく願ひ続け、祈り続けられよいのです。〈神はすみやかにさばいてくださる〉、神は私たちの祈りに応えようと手ぐすねを引いて待っていて下さいます。決して不義な裁判官のように祈りをたなざらしにはありません。もちろん、神の知恵には測り知れない深さがあり、

待たされることもしばしばですが、神が私たちの祈りに敏感であり、深い関心を持つておられることに変わりありません。基本的にはすぐに応えようとしておられるのです。

不義な裁判官がいよいよやながら訴えを取り上げたのとは違って、神はどこまでも公正なお方で、長い時間がかかっても私たちの真実を関係者の間に明らかにしてくださいます。ですから私たちには「正しいさばきをするかたに、いつさいをゆだねておられた」イエス様の生き方が開かれているのです（1ペテロ2・23）。

なおイエス様は（人の子が来るとき、地上に信仰が見られるであろうか）とおっしゃって、私たちに釘を刺されることをお忘れになりません。この信仰とは、神への幼な子のような信頼に他ならないでしょう。再臨のときまで、私たちが失望して祈ることをやめてしまわない姿を主は見たいと願っておられます。

結論

ここで私たちに求められているのは、すぐにでも応えようとしておられる神をいつも信頼することです。どんなときでも諦めないで祈り続けましょう。

研究資料

(宮澤清志)

今週から待降節前までの4つの主日にわたって、「キリストの教えと働き」という単元にはいる。ヨハネからバプテスマをお受けになること(マタイ3・13)を契機に宣教を開始されたイエスは、み言葉(教え)と御業(働き)を通して「神の国」の福音を示された。今日の聖書は、イエスの「教え」の中でも「祈り」に関する教えである。

テキスト

1 この節は、いつでも祈るべきことの奨励であり、このたとえ話の緒論ともなっている。この節の奨励のように、たえず祈るべきこと(1テサロニケ5・17参照)は、ユダヤ教の教えと対立している。ユダヤ教では、1日3回祈ることが奨励されており、度々の祈りは禁止されている。

2 裁判官 この裁判官は、「不義な裁判官」(6)と言われている。裁判官は、旧約ではしばしば、具体的に、特に貧しい人々や孤児、やもめに対して暴虐をふるう者として描かれている(イザヤ10・1～2)。なお、ユダヤ教の法廷裁判は複数制であり、この裁判官は、文脈によれば自分一人で開廷も判決も下せることから、異邦人の裁判官、すな

わちヘロデカローマの支配下にある裁判官であろうと推測される。

3 やもめ やもめは旧約においては人からの助けのない、暴虐と搾取にさらされやすい弱い者の典型例としてあげられている。そうであるから神から特にその訴えを聞いて頂けると約束されてもいるのである(出エジプト22・21～22、申命記27・19、エレミヤ7・1～15他)。このやもめの願いは、**わたしを訴える者** から守ってくださいるように、ということであった。具体的な内容はわからないが、この当時のやもめは、たとえば夫からの遺産であった土地や家屋を金持ちに奪われたり、あるいは亡夫の借財のために子供が売り飛ばされたりということが起こっていたようである。

4 5 たびたびきて、願ひ続けた(3)やもめに対して、裁判官は、**しばらくの間** 聞き入れないでいた。**心のうちで考えた** 新共同訳では「ひとりごとを言った」と訳している。ルカによる福音書で登場する人物は、しばしば「心の中で」話したり考えたりしている(ルカ15・17、16・3)。この言葉に続いて、この裁判官は心の中で話し始める。**4 b**は2節の繰り返しであり、この裁判官のもっている性

質を再現する。**面倒をかける** 原語では、非常に強い言葉で「目の下を打つ。黒目を与える」という意味である。私に打撃を与えて目の下を黒くする、という意味であろう。**彼女のためになる裁判** 直訳は「彼女を正当に扱うことにしよう」となる。**絶えずやってきてわたしを悩ます** とは、終わるまでやってきて、わたしの目の下を黒くする となる。**絶えず** とは、ひっきりなしにという意味の他に、終わりまでという意味も含んでおり、この言葉は後半の終末の裁きの備えともなっている。

6 **そこで主は言われた** この節から、前節までのたとえ話の適用を語られる。**不義な** 買収しうる裁判官、あるいはこの世的、といった程度の意。

7 **まして神は** 前節までは、裁判官とやもめという図式であった。しかしこの節では、その対比が神と選民という図式へと変わっている。もしも不義な裁判官が、しつこい嘆願に降参するのであれば、まして愛の神は、その選民の祈りを聞いて、お裁きにならないはずがない、ということである。**選民** 旧約時代では、選民とは、主なる神との契約の關係に生きていたイスラエルの民とされていた。しかし新約の時代にあつて、選民とは、キリストを信じて生き

る教会であるとされる。**長い間そのまましておかれることがあろうか** 直訳すると「彼らについて寛大であることがあろうか」となり、この「彼ら」の理解によつて様々に訳が分かれる。たとえば彼ら＝選民とすれば、「裁きを行わずに選民を長く待たせるであらうか」、また、彼ら＝選民の叫びととれば、「選民の叫びの声を気長に聞いておられるであらうか」、また彼ら＝迫害者ととれば、「裁きを行わずに迫害者に対して寛容にしておられるであらうか」となる。幸い、いずれの場合も、結局意味するところに大差はない。

8 **あなたがたに言っておくが** 「われ汝らに告ぐ」(文語訳)。ここで語調が非常に厳しいものになる。**神はすみやかにさばいてくださる** 選民の叫びを、迫害者によつて起こされた苦悩の叫びとして、神は裁いてくださるということ。**信仰** この信仰には定冠詞がついており、具体的には人の子の到来まで絶えず祈り続ける信仰を指すのである。せっかく、迫害の中の選民のために人の子が来られても、その時、地上に信仰がなかったとしたら、という警告の意味も込めた言葉であらう。

参考図書 A・M・ハンター「イエスの譬えの意味」(新教出版社) 他

聖書

ルカ18・1〜8

タイトル

失望しないで祈る

暗唱聖句

イエスは失望せずに常に祈るべきことを、人々に譬で教えられた。ルカ18・1

目標

すぐに答えられない祈りにおいても、忍耐をもって祈り続ける者となる。

導入

(水野晶子)

こんな話を聞いたことがあります。天国の倉庫に、リボンが付いた沢山のプレゼントが置いてあります。クリスマスサンタの倉庫ではありません。実は、このプレゼントは届け先がわからなくなったもののなのです。神様は、お祈りでお願ひされたことを一番良い時に届けたいと準備したのに、途中でお祈りをやめてしまったために、送ることができなくなってしまったのです。もったいないですね。

皆さんの中にも、一回か二回お祈りして、あきらめてしまった人はいませんか？ お祈りしても聞かれないと勝手に思い込んで祈るのをやめてしまっていないですか？

イエス様は失望しないで祈り続けることを、こんなたとえ話で、教えられました。

悪い裁判官でも

ある町に、神を恐れず、人を人とも思わぬ裁判官がいました。いばつていて、人を助けようなんて思っていないその裁判官のところに、ご主人をなくして誰にもたよることのできない女の人がやってきました。困った問題が起きて訴えられたので、裁判をしてほしいとお願ひするためです。この裁判官は、金儲けににならないし、関わるのは面倒だと思ひ、すぐ追い返しました。ところが毎日、毎日やってきては裁判をしてほしいと訴えるのです。断つても追い返しても来るのです。うるさくてしかたありません。あまりのしつこさに我慢できなくなつて、「もうたぐさんだ、しかたがない。裁判をしてやろう。そうすれば煩わされることもなくなるだろう」と、裁判をする事にしました。

祈りに答えてくださる神様

イエス様は「こんなひどい裁判官でも、訴えを聞いたのだから、まして正しい神様が毎日、夜も昼も祈る人々を放っておかれることはあるでしょうか。いいえ決してそんなことはありません。神様は祈りを聞いて答えてくださるかたです」と失望しないで熱心に祈ることを教えられました。

みなさんは、祈りに答えてくださる神様を知っています

か? 「本当に神様は聞いてくださっているのかな?」と疑ったり「こんなこと祈ってもきつと無理だよ」と信じられなかったり、初めのうちは祈ってもだんだん祈りが簡単になって、そのうちにやめてしまうことはありませんか? 毎日、同じことを同じ言葉で祈ってしまつて、神様とお話するのでなく、習慣で祈っていませんか。

♪君は神さまにネ、話したことあるかい? 心にあるままをうち明けて、天の神さまはネ 君のこと何でもわかつておられるんだ 何でもね だから空仰いで 「神さま」と一言 祈つてごらんよ わかるから 小川のほとりでも 人ごみの中でも 広い世界の どこにいても 本当の神さまは いまも生きておられ お祈りに答えてくださる♪ (新聖歌48) と賛美にあるように、神様にいつでもどこでも、どんなことでも祈りましょう。神様はお祈りに答えてくださいます。あきらめないで失望しないで祈り続けましょう。

失望しないで祈り続けた人

イギリスの国に、ジョージ・ミューラーという先生がいました。両親のいない子どもたち三千人を養い育てていました。先生はいつも神様にお祈りして、祈りの日記をつけ

て、神様がどれだけ祈りに答えてくださったか記録してきました。ある時、子どもたちのお昼に食べるものが何もありません。コック長はミューラー先生にそのことを知らせました。すると、ミューラー先生は「神様にお願ひしましう。いつものようにお皿を並べておきなさい」といわれて、一生懸命祈られました。15分前になつても5分前になつても何も起きません。子どもたちはお腹を空かせて待つています。その時です。馬車の音が聞こえ、たくさんの食料が届けられました。神様が、誰かの心にミューラー先生のとこに食料を届けるように語りかけられたのでしょうか。このように、すぐ答えられた祈りもありますが、何十年も祈り続け、ミューラー先生が亡くなってから何十年もたつて、祈りが答えられたこともありました。

私たちも神様を信じて、疑わず、あきらめず、失望しないで祈り続けていくとき、神様の方法で、必ず答えられることを信じて、忍耐を持って祈り続けましょう。

♪祈つてごらんよわかるから♪

(新聖歌48、PW7、イン70他)

聖書 ルカ18・9～14 テーマ 義とされる道

序論

(石田高保)

神から義とされるかどうかの対比が、このたとえ話ほど鮮やかなものはないでしょう。神の私たちを見る目は、私たちが自分や他の人を見る目とはずいぶん違うことを思い知らされます。神の見る目、別な言い方をすれば聖書的な価値観をつちかうことが私たちの生き方と生活に変化をもたらします。

一、律法主義のわな

イエス様はこのたとえ話をだれに向かってしておられるのかというと、それは「自分を義人だと自任して他人を見下している人たち」です。彼らはパリサイ人になとえられています。いっぽうの取税人は、道徳的にも社会的にもパリサイ人の対極にいた人です。パリサイ人は「わたしは…貪欲な者、不正な者、姦淫かんいんをする者ではなく、また、この取税人のような人間でもないことを感謝します」と神に語りかけているところを見ると、近くで祈っている取税人を明らかに見下げていることがわかります。自分の立ち位置は神との関係ではな

く、取税人や他の人に優越する関係に依存していたということになります。つまり彼の目には神は入っておらず、ただ自分と他の人との関係に関心があつたのです。神との関係によって立つのであれば、人はおのずから他の人との相対的な関係に依存するようになります。別な言い方をすれば神様から無条件で受け入れられていることがわからなければ、人と比べることによって自分の相対的な価値を見いだすほかはありません。それは必然的に人をうらやむか、人を見下げるかのどちらかしかないことになります。つまり劣等感が優越感のどちらか、あるいはその両方に捕らわれて生きるしかないわけです。舟から降りて陸に上がらない限り、揺れが収まらないのと同じです。

このように神を計算に入れない相対的な価値観は、自分の優位性を誇示せずにはアイデンティティーを保てないので、パリサイ人は自分の良い行いを神の前に誇ります(12)。自分の宗教行為と引き換えに祝福してください、いや祝福して下さらなければなりませんという思いでしょう。つまりギブ・アンド・テイクの関係を無意識のうちに神に要求しているわけです。しかし残念ながら神は取引をなさいません。神が与える場合、それは取引ではなく、恵みによるからです。

二、律法主義からの解放

行いによって神から義とされようという生き方は、決して神の意図されたことではなく、アダムがエデンの園で神に背いた時に発生したものと云ってよいでしょう。神の前に出るためにいちじくの葉で裸を隠そうとしたのは、まさに自分の行いによって神に義とされようとしたことの現れです。彼は神に依存しなくても、自分の力で人生を切り開けると考えました。その結果、神により頼むのではなく、自分の行いにより頼もうとする間違った価値観が全人類に及ぶことになりました。その典型的な人物が、このパリサイ人です。彼はあまりに自分に依存しているため、神により頼むことがわからないうほどこになっています。もつと言えば彼は神を必要としていません。これこそ律法主義の正体であり、人間を神から遠ざけるものです。今日それは完全主義、成果主義と言いつてもできるでしょう。これは人間の本性に深くしみついてゐるため、気づくことも、取り除くことも単なる努力ではなえず、ただみ言葉と聖霊により頼むほかはありません。

いっぽう、取税人と言えばパリサイ人とは正反対で、自分の罪深さに打ちのめされています。彼は心底、神を必要としているのです。〈神様、罪人のわたしをおゆるしてください〉と

いう祈りほど、神から受け入れられるものはないでしょう。なぜなら自分の本当の姿をさらけ出して神の憐れみに寄りすがっているからです。取税人の生活はお世辞にもほめられたものではなく、いわゆる悪人の部類に入るでしょう。見た目で言えば真面目なパリサイ人に軍配が上がりそうなものです。しかし神に義とされたのはこの取税人のほうであったとは思いますが、それは全ての人が生まれた時から身につけてきた律法主義的な価値観となじまないからです。しかし神の国は（おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされる）世界です。もしクリスチャンの間でも見栄えや出来栄で評価されるなら、そこは神の国ではないでしょう。神の前に自分は何者でもないと思えることが評価されるのです。

結論

では神に義とされる道とは何でしょうか。それは「人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、ただキリスト・イエスを信じる信仰によることを認め」（ガラテヤ2・16）ることにはなりません。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

9 名指しはしていないが、イエスは明らかにパリサイ人に対してこのたとえを語っており、ここに彼らの特徴がにじみ出ている。**自分を義人だと自任して** 彼らは自らの義に確信を持っている。その姿勢は実は神に頼る行為ではなく自らに頼る行為へと促すものであり、それは私たちにも起こりうる姿勢である(Ⅱコリント10・7)。もう一つの特徴は、**他人を見下ろしている** 点である。

10 **パリサイ人** 「分離された者たち」の意。由来は諸説あるが、彼らが律法、特にモーセ五書に記されている「聖め」の厳守において、聖くない者から「自らを分離する者」であったという説が一般的である。これは外から付けられたあだ名であった。**取税人** ユダヤ人は取税人を、外国、特にローマ政府のために働く人間であるという理由から「罪人」「異邦人」「遊女」同様憎んでいた。

11 **パリサイ人は立って、ひとりてこう祈った** まず、パリサイ人の祈りの言葉に先立って、祈りの姿勢(身体的姿勢、霊的姿勢とも)が語られる。立って 立って祈

るのは、当時のユダヤ人の祈りの通常の姿勢である。しかし、ルカはここでただ単に身体的姿勢を語るのではない。「立ち」(13)より強い言葉、すなわち「自分を立てる」という意味で用いている。彼は人々の注目を集めるために、なるべく目立つところに立って、信心深そうな態度で祈ったのである。ひとりて「心の中で」(新改訳、新共同訳)。この祈りは自分自身に向かった祈りであって、神にささげられた祈りではなかった。それはもはや祈りではなく、独白とでもいえるものであり、「立って」という姿勢と重ねると、演技とでもいえる行為であった。

神よ、わたしは…感謝します パリサイ人は、自らの功績を列挙するのに先立って(12)、自分以外の人間がいかに多くの罪を犯しているかを数え上げている。ここにおける祈りの姿勢は、自分と他人との分離(パリサイ)である。

12 他の人々のようではないことを切々と語った後、自らがどんなに律法を忠実に守っているかを説く。**一週に二度断食** 律法は、年に一度の断食を規定している(レビ16・29)が、パリサイ人は、ユダヤ人皆のため、月の週の二度断食したようである。**全収入の十分の一をさ**

さげて 律法は、穀物畑と果樹園と群れの収入の十分の一に限っていたが、パリサイ人は、律法の規定のない「はつか、うん香、あらゆる野菜」の十分の一もささげていたようである。

13 取税人は遠く離れて立ち 祭壇から遠く離れたのか、それとも人々から遠く離れたのかは諸説あつて定かではないが、いずれにしてもパリサイ人の自信に満ちた堂々たる態度とは対照的である。**目を天に向けようともしない**で 通常のユダヤ人の祈りは、目を天に向けるのが一般的であつた。「ユダヤ人は通常、手のひらを上に向けて、腕を広げて、あたかも天の賜物を受け取るように、そして目も上げて立つた」(ファラー)。**胸を打ちながら** この行為は、罪に対する深い後悔と悲しみの念を表す所作であつた。これらの祈りの行為から、この取税人の、罪のゆえに神のみもとに近づいて祈る道を閉ざされた自らの、苦悩と絶望の姿が見て取れる。**罪人のわたし** 単に「すべての者は罪人である」という意味ではなく、他でもないこの罪人のわたし、という意味が含まれた強い言葉で語られている。**おゆるしてください**(ギ)ヒラスコマイ)は、和解する、あがなう、償う、赦すといっ

た意味で、特に霊的な苦しみに対して向けられている言葉である。すなわち、罪に苦しむ者を赦し、贖い、和解される神のあわれみを求める言葉なのである。

なお、この両者の祈りの更なる相違は、「わたし」という言葉にある。パリサイ人の祈りにおいて、「わたし」は常に主語として用いられていた。一方取税人の祈りにおける「わたし」は、「わたしを」という目的語として用いられていた。取税人は、自分自身に関して何も語ることはできない。彼は、自らを神の赦しの中におかなければ、生きることも死ぬこともできない弱い罪人として、ただ神のあわれみのみを乞い求めているのである。

14 あなたがたに言っておく 何か重要な宣言を、權威をもつて語るときの慣用句(10・12、24、11・9、51、12・4、5、8、等)。**神に義とされて** 義とされるとは、神と人との正しい関係を表す言葉で、神のみこころになつてそのご支配の中に受け入れられる、という意味を表す。直訳は「神によつて正しいと宣言された者、正しいと認められた者」となる。

参考図書 「説教者のための聖書講解―ルカによる福音書」(日本基督教団出版局)

聖書

ルカ18・9～14

タイトル

豊かな心

暗唱聖句

神様、罪人のわたしをおゆるしてください。

目 標

神様の前に自分の罪を認め、
謙り、罪赦
され、義とされる者となる。

導入

(飯田勝彦)

学校の教室に「整理整頓」って書かれた紙が貼ってありますか？ ときどき注意されることもあるかもしれない。きちんと整理されていると、スツキリしますよね。何が入っているか、すぐに見つけることができます。整理整頓は机や身の回りのことだけでなく、私たちの心にも必要なのです。

私たちの心のなかには、どんなものが入っているのでしょうか。

神様は心を見られる

今朝の箇所には、2人の人物が出てきます。一人は、律法を厳格に守っているパリサイ人です。もう一人は、税金を取り立てる取税人でした。

彼らは祈るために宮に上ってきました。この二人は、皆さんと同じように神様を信じている人でした。

11～12節に、パリサイ人の祈りが記されています。他の聖書の訳には「心の中でこのように祈った」とあります。私たちも声を出さずに、心の中で祈ることがありますね。神様は、誰にも聞かれていない「心の祈り」もしっかり聞いて下さっています。また、どのような思いで祈ったのかも知って下さいます。それは、神様は私たちの心にあることのすべてをご存知だからです。聖書に「わたしの舌に一言もないのに、主よ、あなたはことごとくそれを知られます」(詩篇139・4)、「人は外の顔かたちを見、主は心を見る」(サムエル上16・7)とあります。私たちの信じる神様は、見えていることだけでなく、心の底をも知っておられる方だということを覚えておきましょう。

神様が喜ばれない心

パリサイ人は祈りの中で、自分が他の人たちのよう貪欲な者、不正な者、姦淫をする者でなく、取税人のような人間でないことを感謝しています。また、自分が断食の祈りと十分の一献金を忠実にしていると祈っています。

す。

皆さんの中に「神様、僕は欲張りではなく、罪を犯さず、この教会学校に来ている人たちのような罪深い人間でないことを感謝します。僕は毎日、聖書を読み、祈っています。また、献金を忠実にささげています」と祈る人がいるでしょうか。

このパリサイ人の祈りを聞いて皆さんは、どう思いますか？ 神様は、このパリサイ人の祈りを聞かれることはありませんでした。なぜなら、パリサイ人の祈りは自己満足であり、自分のような正しい人はいないというぬぼれ、人を見下していたからです。

神様は、いくら正しい行いをしていたとしても、パリサイ人のような心を持っているなら決して喜ばれません。

神様が喜ばれる心

取税人の祈りや態度は、パリサイ人とは違いました。彼は、遠く離れ立ち、目を天に向けようとしないうで、胸を打ちながら「神様、罪人のわたしをおゆるしく下さい」と祈っています。

この取税人は、自分の罪深さをよく知っている人でし

た。彼は、罪人であるために、神様に近づくことも、神様に顔を向けることもできない者であることを認めていたのです。彼は胸を打ちながら祈りましたが、これは悲しみを表す行為です。ですから、取税人は罪を犯し、神様を悲しませて自分の愚かさを情けなく思い反省しながら、神様の前で赦しを祈ったのです。

神様は、パリサイ人よりも取税人の祈りを聞かれ、彼を義とされたのです。義とされることは、神様に受け入れられる者にされたということです。神様は、自分の弱さや罪を素直に認めるへりくだった心を喜ばれます。

まとめ

私たちの心は、神様に喜ばれるでしょうか。

水が低い所に流れるように、神様のあわれみと恵みは、高ぶる者ではなく、へりくだる者へ流れます。神様の恵みが流れている心には、神様への愛と人に対する愛、そして喜びが豊かにあります。神様に罪赦され、義とされて豊かな心を頂きましょう。

♪わすれないで♪

(ホ73)

聖書 テーマ ルカ18・18～30 キリストに従う道

序論

(石田高保)

人は自分の存在している意味をさまざまな方法で確かめたいと願うものではないでしょうか。心から納得する意味を知りたいと。

一、こころ満たされない生活

ここにひとり、心の満たされない役人がいました。彼は裕福な家に生まれ、高い教育を受け、真面目であり、健康で、何一つ不自由なことはなかったようです。当時、お金持ちであることは神から特別な祝福を受けている人と考えられていました。けれども彼の心は満たされず、それがなぜなのかはわからなかったので、悩んだすえ有名なイエスに質問しようとしてやって来たわけです。(よき師よ、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか)、とても真面目な質問です。彼はもっと財産が欲しいとか、地位を得たいとか、贅沢(ぜいたく)がしたいとか言ったわけではありません。永遠の生命という目には見えないけれども、人間にとって最も大切なものを真剣に求めたのは大正解でした。

それに対してイエス様は肩透かしするような答えをしておられます、(いましめはあなたの知っているとおりである、「姦淫するな、殺すな、盗むな、偽証を立てるな、父と母とを敬え」)。これに対して青年は憮然(ぶぜん)として(それらのことはみな、小さい時から守っております)、彼は自分の真面目な生き方を誇りとし、拠り所としています。自分が正しい生き方をすれば、それに対して神が報酬を与えてくれると考えているふしがあります。裏返せば真面目に生きなければ神は祝福して下さらないと思っています。つまり人生は自分の行いにかかっているものであり、神は人間が正しく生きるかどうかで評価するものと考えているわけです。しかし結局は自分免許で判断するほかはないので、満足はなく、また何が足りないのかもわかりませんでした。

二、その理由

するとイエス様は(あなたのする事がまだ一つ残っている。持っているものをみな売り払って、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして、わたしに従ってきなさい)、イエス様は誰に対しても全財産を投げ出さなければ、永遠の命を得ることはできないと言っているわけではありません。この青年のように財産を心の拠り

所に行っている人に対してチャレンジしておられるのです。財産だけでなく自分の誇りとするものを抛り所としている人に対してと同様です。仕事、地位、健康、趣味、スタイルや美貌、自分の真面目さ、頭の良さ、何でも心の抛り所となり得ます。しかしそれらは良いものであっても、人を心から満足させることはできません。それらはみな偽りの抛り所であって、必ずその人を裏切るからです。イエス様しか人の心を満たすことはできません。イエス様は彼にそのことを悟って欲しかったわけですが、〈彼はこの言葉を聞いて非常に悲しんだ。大金持ちであつたからである〉、王より飛車を可愛がりと言われるように、自分の財産と永遠の命を天秤にかけたとき、青年は財産のほうを選び取りました。まだイエス様に従う心の準備はできていなかったのでしょうか。

三、こころ満たされる生活

大多数の日本人が宗教に対して距離を置くようになった理由の一つは、豊か過ぎることにあると思われます。それはみんながお金持ちになったという意味ではなく、神が必要に感じられないほど豊かになってしまったということです。たいいていのがお金さえ出せば解決する社会になっているので、わざわざ神頼みする必要を感じません。「あなたがた貧し

い人たちは、さいわいだ」(ルカ6・20)、つまり貧しい人は自分の持ち物に頼れず、神にだけ頼ろうとするので、救われやすいというわけです。いっぽう豊かな人は、神に頼らなくても自分で解決しようとするし、ある程度できてしまします。意識しないで神から自分を遠ざけるので、ますます神がわからなくなるのです。

では経済的に貧しくなければ神様を求めないのかというとそうではありません。主は「こころの貧しい人たちはさいわいである」(マタイ5・3)とも言っておられます。豊かであっても、自分は頼りにならない、神に頼りたいという聖書の言うところの心の貧しさを持つ人は救われ得ます。

結論

〈持っているものをみな売り払って、貧しい人々に分けてやりなさい〉、これは救いの条件ではありませんが、救われた者の指針となります。文字どおりの意味ではないにしても、奉仕でも、人助けでも、ボランティアでもいい、誰かに自分を与えるとき、人は心から満たされるものです。ですからイエス様は「受けるよりは与えるほうがさいわい」だと言われるのです(使徒20・35)。与える生き方こそ、キリストに従う道であり、こころ満たされる道です。

研究資料

(宮澤清志)

この箇所は、共観福音書（マタイ、マルコ、ルカ）いずれにも登場する、比較的よく知られた物語である。他の福音書の並行記事（マタイ19・16～29、マルコ10・17～30）にも目を通すと同時に、ルカと他の福音書との相違についても黙想して、説教への備えとしていただきたい。

テキスト

18 役人 裁判官や最高法院の議員にもこの用語を用いるが、どちらかといえばこの「役人」はユダヤ教の指導者の意味であろう。**よき師** 「よき」とは、イエスの美德と敬虔^{けいけん}さを言い表しており、それゆえこれは、彼が提起した問いにイエスなら答えられるという含みを持つ言葉であろう。

19 神ひとりのほかによい者はいない 聞く者の注意をイエスの人格から神へと向け直す言葉。

20 いましめ 出エジプト20・12～17、申命記5・16～21に記されている「十戒」の第五戒以下の対人関係の律法。ただし、ルカに記されている順番は、マタイやマルコ、あるいは旧約の十戒の順番とは異なっている。

21 それらのことはみな、小さい時から守っております 彼

は、熱心に律法を守っていたのであろう。しかし、彼はどうも「律法を守る」ことだけでは永遠の生命を受けるには十分だと考えていたようで、マタイでは、この言葉の後「ほかに何が足りないのでしょうか」（19・20）と続けている。

22 まだ一つ 「一つだけ」（新改訳）。しかし、この後イエスが求めておられることは、少なくとも2つある。「持っているものをみな売り払う」と「わたし（イエス）に従うこと」とである。持っているものをみな売り払って、貧しい人々に分けてやりなさい 20節の十戒のリストでは取り上げられていなかった戒めが問われている。すなわち第十戒の「ほしがつてはならない」（出エジプト20・17）という戒めである。この命令は、**そうすれば、天に宝を持つようになる** という約束が伴うことによって、単なる自己犠牲や自己放棄ではなく、積極的な隣人愛の要求であることがわかる。**わたしに従ってきなさい** 私たちの優先事項と献身とは、相互に分離できるものではない。私たちは、神に仕えるか、富を追求するか、のどちらかを選択しなければならぬ。

23 26 彼はこの言葉を聞いて非常に悲しんだ マタイとマルコが、この役人は、その後「立ち去った」（マタイ19・22、マルコ10・22）と記すのに対し、ルカはその記述を（おそら

く、意図的に)省いている。それによってルカは、この役人がその後の会話の場にいたとの推測を許し、彼が普通の弟子として入信できた可能性を残しているのかもしれない。より重要なことは、この後の部分で、マタイとマルコでは、イエスが、ご自分の旅に同行するような「弟子」に向けて語っている印象が強いのに対し、ルカでは、この役人を含む一般のすべての人々への招きであることが強調されている点である。そのことは、マタイ、マルコでは「弟子たち」(マタイ19・25、マルコ10・24)とあるのが、ルカでは、これを聞いた人々(26)となつてのことからも言える。なんとむずかしいことであろう。ここでは「できない」ということを遠回しに語る。次

節のたとえの理解や、27節の「人にはできない」という言葉を照らし合わせるとそのように解釈できる。それでは、誰が救われることができるのですか ユダヤの人々は、日常生活において、富の大小は別として、それらに依存して生活していた。このことは、程度の差こそあれ、現在の私たちにおいても同様である。

27 人にはできない事も、神にはできる 旧約にもこれと同じような趣旨の思想がある(創世記18・14、ヨブ42・2等)。人が神よりも富に、神の戒めよりも自ら抱えているものに頼

ろうとする限り、救われて神の国に入ることは不可能なことである。この役人をはじめとしてユダヤ人は、イエスの言葉を、神の国にふさわしい人間であらねばならないという我々の側の資格を問うているものと理解しようとしている。他方イエスは、それは人間の資格ではなく神からの恩恵として与えられるものであるとして語った。全知全能なる神は、私たちの思いを越えて働かれるのである。

28 自分のものを捨てて 新改訳には「自分の家を捨てて」とある。「自分の所有」という意味であろう。弟子としての条件は、「だれでも、父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分の命までも捨てて、わたしのものに来る」(14・26)ことである。

29 神の国のために 「福音のために」とも言い換えることのできる言葉である。イエスに従うことは神の国を伝えることである。

30 この時代…きたるべき世 弟子が受け取る報酬は、現在の報酬と将来の報酬の両方である。永遠の生命 ルカは現在の報酬より、将来約束されている永遠の生命に重きを置く。

参考図書 11月3日分と同じ。

聖書

ルカ18・18〜30

タイトル

永遠の命をゲットしよう！

あなたのこと

暗唱聖句

あなたがまだ一つ残っている。ルカ18・22

目標

捨てるべきものを捨ててキリストに従う。

導入

(飯田勝彦)

皆さんは、日本は世界でもトップ3に入る長生きの国ということを知っていますか？ 多くの人が健康に関心を持ち、いつまでも元気でいたいという人が多くなっています。皆さんも元気で長生きしたいと願っていますか？

永遠の命を求める人

今朝登場する人は、イエス様にびつくりするような質問をしました。「イエス様、私、長生きしたいのですが、何をしたらよいでしょうか」と質問したのなら、びつくりすることはありません。しかし彼は「イエス様、永遠の命を得るためには何をしたら良いのですか」と尋ねたのです。皆さんは誰かに同じ質問をしたことがありますか？

すか？

昔から人は、永遠の命に憧れて来ました。数千年前のエジプトの墓には「太陽のごとく永遠に」とか「永遠の命」という言葉が多く刻まれているそうです。

人が一番恐れていることは、死ぬことではないでしょうか。裏を返せば、永遠に生きたいということになるでしょう。皆さんは、この人のように真剣に永遠の命を求めていますか？ でも、永遠の命って本当に手に入れることができるのでしょうか。

永遠の命のための悔い改め

永遠の命を求める人に対して、イエス様は「あなたが永遠の命を求めているなら、健康な食事をして運動も欠かさず、そして毎日8時間は眠りなさい」とアドバイスはされませんでした。

イエス様の言葉は意外でした。それは「神様の掟を守りなさい」と言われたのです。それに対して「私は子どもの中から守ってますよ」とその人は応えます。するとイエス様は、「あなたのしなければならぬことが一つ残っている。あなたの財産を売り、貧しい人に分けてあげなさい。そして、私に従って来なさい」と言われまし

た。するとその人は非常に悲しみました。それは、その人が大金持ちだったからです。

皆さんもこの人の気持ちがよく分かるでしょう。せっかく貯めたお金を自分からではなく、人から手放しなさいと言われると難しいですね。イエス様は、悲しんだその人を見て「財産のある者が神の国には入ることは何と難しいことだろう」と言われました。

私たちは、持っているものを全部ささげないと永遠の命をもらえないのでしょうか。たとえ財産をささげても、そこに喜びがなく、洪々ささげたならばイエス様はどう思われるでしょうか。

イエス様は、助けの必要な人に心を向けられないで、財産に心を支配されている自己中心の罪を指摘されたのです。

永遠の命を頂くために必要なことは、自己中心を捨てることです。それが、悔い改めです。

永遠の命のために従う

イエス様は「わたしに従いなさい」と言われました。永遠の命とは、実はイエス様の内にあります。そしてイエス様だけが、永遠の命を与えることができるお方です。

ですから、いくらよい行いをして、イエス様に従っていないならば、永遠の命を頂くことはできません。また、イエス様を頭で知っているだけでも永遠の命を得ることはできません。

イエス様に従うとは、イエス様を私たちの救い主と信じることです。罪があるなら幸せに暮らせなさいばかりか、神様から滅びの裁きを受けなければなりません。でも、神様は皆さんが救われて永遠の命を受け取ることを願っておられます。そして、永遠の命であるイエス様で心を満たしたいと願っておられます。

まとめ

皆さんの心は、永遠の命であるイエス様をお迎えすることができですか？ 心の中に自己中心などの罪があり、それを捨てることができないとするならイエス様に入って頂くことはできません。罪を大切にもっているなら幸せは入れません。悔い改めによって捨てなければならぬものを捨て、永遠の命を頂きましょう。

♪ゆるすためです♪

(ホ58、イン25)

聖書 ルカ19・1～10 テーマ キリストとの出会い

序論

(水川武志)

ニコデモやサマリヤの女と同様に、キリストとの出会いが、魂の回心に至った物語です。キリストは、いつも変わらぬお方です。ここでのザアカイになされた事を、主は私たちのうちにも行うことを望んでおられます。

一、ザアカイという人

主がエリコの町に入られた時のことです。エリコは世界最古の城郭都市でエルサレムに近く、門のすぐ側には収税所があります。ザアカイは収税人のかしらで、しかも金持ちであったのです。当時のユダヤ人は収税人を嫌い、犯罪人扱いにしていました。そのうえ、高額の税を徴収し、上前をはね、金持ちになった収税人のかしらであれば、市民の対応は良いはずがありません(3)。しかし、ザアカイは収税人レビ(マタイ)が救われ(5・27)、十二弟子の一人に選ばれた事を知っていたのでしよう。強い好奇心を持ってイエスにお会いしたいと願っていました。彼がなぜ収税人になったのかは不明ですが、ザアカイとは、「清い」と言

う意味の名前です。幼い時から「清い・清い」と呼ばれてきた経験は、彼の潜在意識に焼き付けられ、主を求める心を呼び覚ましたのでしよう。

二、お出会いくださるキリスト

身を木陰に隠し、のぞき見るザアカイに対して、主の方から「ザアカイよ、急いで下りてきなさい」と語りかけてくださいました。ザアカイはこの時まで主を知らなかったのに、主は彼のすべてを知っていてくださいました。ザアカイだけでなく、私たちに対してもすべてを知っていてくださり、最高の配慮をしてくださるのです。前もっての打ち合わせもなく、「きょう、あなたの家に泊まることにしているから」とは、唐突なお言葉に思えます。それは、木に登ってまでも主にお会いしたいと願うザアカイの思いを知っての、主の応答です。主は、切実に求める者の思いを知ってくださるお方です。彼は社会的な地位も、富も手にしている社会的成功者の一人でした。しかし、人々からは罪人呼ばわりされる中で、心の中には満足できない寂しさがあつたに違いありません。

大金持ちの役人は、永遠の命を求めて来たのに、富にこだわってキリストに従いきれませんでした(18・18～27)。

その時、主は「財産のある者が神の国にはいるのはなんとむずかしいことであろう」と言われました。人々が「それでは、だれが救われることができるのですか」と尋ねると、主は「人にはできない事も、神にはできる」と言われました。この時の主の答えが、ここに表わされているのです。〈失われたものを尋ね出して救う〉御業の実現です。

三、全く変えられたザアカイ

主を喜んで迎え入れた(6)ザアカイは、全く変えられました。自分の財産の半分を貧民に施すと誓ったのです。大金持ちの役人にはできなかった事を、ザアカイは自主的に申し出ました。富に対して至上の魅力を感じていた彼であったのに、更に不正な取り立てについては、四倍にしてつくなうと言うのです。主イエスにお会いした事によって、彼は本当に変えられました。彼は全く新しい人間に作り変えられ、新しい生き方をする者となったのです。

ザアカイは、それからも取税人のかしらとしての仕事を続け、資産家であったと伝承にあります。状況は同じでしたが、その中で彼は新しい者として、新しい生き方を貫いたのです。主に出会って頂いた恵みは、その後の彼の生涯を支え続けたのです。

主イエスは、今日も信ずる者のうちに同じことをしてくださるのです。K子さんは、教会学校の問題児でした。隣近所の人たちも彼女が来ると物がなくなると言って玄関に鍵をかけるのです。彼女が中二の時、夏のバイブルキャンプに参加しました。メッセージを聞くうちに、涙を流して罪を悔い改め、キリストを受け入れました。その日からK子さんは全く変えられました。教会学校には一番早く来て、先生の手伝いをし、一番前の座席に座ってメッセージを聞きます。公園伝道にも参加して、集まった子どもたちの世話をするようになりました。近所の人たちが、「教会はすごい。あの子を全く変えてしまったのだから」と言うようになって、教会に来る人も起こされるようになったのです。

結論

ザアカイが変えられた時、イエスは〈きょう、救がこの家に来た〉と言われました。キリストとの出会いは、ザアカイを変えただけでなく、家族や周囲の人々に祝福をもたらしました。生徒たちが真にキリストと出会えるように、教師であるあなたが、まずキリストの御前に出て、奉仕に励もうではありませんか。

研究資料

(宮澤清志)

今週のテーマは「キリストとの出会い」である。先週は、キリストに出会いながらも自らの財産を捨てることができなかった青年の物語を見た。私たちが捨てるべきものを捨てることがどれほど難しいかの好例である。

一方、本日の物語は「ザアカイ」である。この男も多くの財産を持っていた人物として聖書に取り上げられている。しかし、先週の「富める青年」とは逆に、この男は自らの財産を貧しい人に施した。まさに「人にはできない事も、神にはできる」(18・27)ことの好例ではないだろうか。

良く知られた物語ではあるが、説教に当たっては、まず「知っている」という思いこみを捨てて、白紙の状態でこの物語に向かうことが求められる。

テキスト

1 エリコ 死海に注ぐヨルダン川の河口から北西約16kmに位置し、対岸のヨルダン方面からの交通の要衝であった。ローマ時代に関税所があった。ここでの徴税人は、ローマ政府より関税徴収を請け負っていた。

2 ザアカイ 「きよい人」「義しい人」といった意味の名前。

彼の特徴を聖書からいくつか書き記しておくと、①彼は取税人のかしらであった(2)。エリコの町は地理的な交通の要衝であったうえに、ローマにとっても重要な地であり、この町の取税人のかしら、すなわち税務署長であったであろうザアカイは、莫大な財をなしたのであると推測される。②彼は背が低かった(3)。③彼の名は、聖書中ではこの箇所のみであるが、彼はその後、カイザリヤの司教(監督)になったと言われている。

4 いちじく桑 果実はいちじくのように、葉は桑のような木。特徴として、枝が低いところから広がっていることがあげられる。従って、ザアカイは容易に登ることができた。

5 ザアカイよ イエスはザアカイの名を知っておられた。しかも、その主導権はイエスのほうにあった。イエスご自身からザアカイの名を呼ばれたのである。きょう ルカによる福音書は、この言葉を単なる時間的な意味での「きょう」として用いるのではなく、救いが時間の中にやってきたという驚くべき真実と、目の前の出来事が誰のためのもののかを示す意味で、非常に重要な意味を持っている言葉として用いている。あなたの家に泊まることにしているから 直訳は「泊まらねばならない」という非常に強い断定的な表現。ザアカイの救いのためにそうせねばならない、という神の定め、神の御旨の表れ。

6 急いで、よろこんで ザアカイの心弾む喜びの表現を的確に描いている。

7 人々 泥棒と同じような取税人のかしらであるザアカイの家に泊まるなどということは、ザアカイから常日頃だまされてる住民たちにとっては信じられないことであつたに違いない。しかし、イエスは「罪人の仲間」(7・34)なのである。

8 立つて(ギ)ヒステミー この語は第一義的には(ある場所に)立つこと、あるいは立つという姿勢を指す言葉と理解されるが、「定める」「決心する」という意味もあわせ持つ言葉である。彼の語つた次の決意の言葉と絡めると、イエスとの出会いが彼を決心させた、と見ることもできる。**主よ、わたしは誓つて**… 律法によれば、賠償は、自発的な弁償の場合は、損害額に四分の一を加えた額を弁償し、また盗品がもとのままで返された場合は二倍、また意識的な強盗の場合は四倍から五倍の弁償を求めている。ザアカイの申し出は、この律法の要求以上の弁償であつて、ザアカイの悔い改めの実である。罪人の家に立ち寄り、温かい交わりをもつてくださるイエスの愛は、その人に罪を自覚させ、悔い改めへと至らせるのである。

9 きょう、救がこの家に来た 5節参照。特にこの文では、救いが「家」に来たことに注目したい。ルカ福音書において、救

いはしばしば個人ではなく「家」に来るという表現がなされる。ザアカイに家族がいたのかは分らないが、一人の人の救いは、ルカにとってはその家全体の救いにつながるということなのである。**アブラハムの子** ルカにとって、アブラハムの子であるということは、ユダヤ人であるという事実以外に、神の救いの計画に基づくアブラハムの子という意味がある。このアブラハムの子を何によって判定するか、ということに関しては、ユダヤ教とキリスト教の長い対立の歴史がある。ユダヤ教ではそれを血統と割礼とに見てきた。しかし、キリスト教では、この問いはアブラハムと同じ信仰とわざとに見る。**人の子**は、この隠れたユダヤ人を探し出して救うために来られたのである。

10 人の子がきたのは、失われたものを尋ね出して救うためである 今回の中心聖句であり、またイエスの使命の本質を指す言葉である(5・32参照)。そして、失われた者たちにイエスが引き起こされるのは「悔い改め」なのである。

参考図書 加藤常昭編訳『説教黙想集成2「福音書」(教文館)他

聖書

ルカ19・1〜10

タイトル

新しくされる出会い

暗唱聖句

人の子がきたのは、失われたものを尋ね出して救うためである。
ルカ19・10

目標

救い主キリストに出会い、キリストを心に迎え入れる。

導入

(飯田 勝)

今、皆さんの一番の仲よしの友だちのことを心に思ってみてください。その友だちのことを思うと、いろいろな楽しいことが浮かんで来るでしょう。そして、「あゝ、〇〇さんと出会えて本当に良かったなあ」と思いませんか？これから皆さんには、たくさんのお会いがあるでしょう。その一つ一つの出会いを大切にしてくださいね。その中でもどうしても出会うて欲しい人がいます。誰だと思えますか？そう、イエス様です！皆さんは、イエス様にもう出会っているでしょうか？

あなたを知っておられるイエス様

エリコという町にザアカイという人がいました。彼の事は「取税人」と言って税金を取る仕事でした。皆さんは

百均に行ったことがあるでしょう。百円の物を買うとレジで百五円支払います。その五円が税金です。これはきちんと決められていることです。でも、当時の取税人たちは、自分が得をするように、決まっているよりも多くの税金を、人々から取りたてていました。また、仕事の都合で、ユダヤ人に嫌われていた異邦人とも関わりがありました。ですから、取税人はユダヤ人から罪人と見られ、嫌われていたのです。ですからザアカイも、町の嫌われ者だったのです。

ある時、町にイエス様が来られました。町中の人がいエス様を一目見ようと集まっていました。ザアカイもイエス様を見ようとしました。でも、彼は背が低く、しかもたくさんの人に遮られて見ることができませんでした。でも、彼はあきらめず、木に登ってイエス様を見たのです。

するとイエス様がザアカイを見上げて「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日はあなたの家に泊まることにしている」と言われたのです。ザアカイにとって、イエス様とは初めての出会いでした。それなのに、イエス様はザアカイのことを知っておられたのです。不思議ですね。

イエス様は今日、あなたの名前を呼べます。イエス様はあなたの名前だけではなく、あなたのことをすべて知っ

ておられるのです。

あなたの友となられるイエス様

イエス様は、みんなから嫌われているザアカイの家に入られました。当時、ユダヤ人たちは罪人と言われるような人と付き合っではいけませんでした。周りの人はイエス様のことを「彼は罪人のザアカイの家にはいつて客となった」と言っで非難したのです。

でも、イエス様は、ザアカイの家に入り、彼の友だちになっでくださったのです。その時、ザアカイの気持ちはどうだったでしょう。みんなから嫌われ、ずつと寂しかったザアカイは、すぐく嬉しかったに違ひありません。

今日、イエス様は「あなたの友だちになりたい」と言われるのです。

あなたを救っでくださるキリスト

ザアカイにとっで、家にお客さんが来るなんて久しぶりだったかも知れません。彼は、できる限りのもてなしをしたでしよう。そして、イエス様といろいろな話をするこができたでしよう。すると突然、ザアカイは立ち上がりしました。そしてイエス様を「主よ」と呼びました。これは彼がイエス様を救い主として心に迎えた瞬間でした。ザアカ

イは、イエス様こそ自分の罪を救し、寂しさを慰めてくださるお方だと信じたのです。

その時からザアカイは変えられました。イエス様に「主よ、わたしは誓っで自分の財産の半分を貧民に施します。また、もしだれから不正な取り立てをもしましたら、それを四倍にして返します」と言い出したのです。

ザアカイはイエス様と出会うまでは、自分に得になることばかりを考えていました。でも彼は人から奪う者から、人に与える者になりました。イエス様に出会っで心が変えられたのです。また、自分の罪を悔い改めました。ザアカイの心は、以前とは違ひ新しい人にされたのです。

まとめ

イエス様は、ザアカイのような罪人を救うために来られました。そして、イエス様はあなたの心も新しくしたいと願っでられます。そのために、「わたしをあなたの心に迎えてくれないか」と言われるのです。あなたはどうしますか？ イエス様を心に迎えてこそ「イエス様に出会った」ことになるのです。あなたはイエス様と出会い、心新しくされたのですか？

♪歌いつづけよう主のあいを♪

(ホ77)

聖書 使徒14・8～18 テーマ 収穫は神の恵み

序論

(金井信生)

教会暦での感謝祭は、アメリカで始まりました。信仰の自由を求めてイギリスからアメリカにわたった清教徒たちが、慣れない土地で飢え死にしそうになり、先住民に助けられて最初の収穫をあげることができました。この時の感謝の集いを記念して、感謝祭として今に続いています。

他の国や他の宗教でも、収穫物や、さらには天地万物を自然の恵み、神の恵みとして感謝する行事や風習はあります。

聖書が、神の恵みへの感謝をどのように教えているかを、使徒14章にあるパウロの説教を通して見ることができます。

一、間違った礼拝

ルステラの町に、パウロとバルナバは入って伝道しました。パウロが話しているのを、足の不自由な男がじっと聞いていました。パウロが「自分の足で、まっすぐに

立ちなさい」と大声で命じると、この人は踊りあがって歩き出しました。

これを見ていた町の人たちが、パウロとバルナバを、神々が地上に降りてきたものと思って祭り上げ、いけにえを献げようとまでしました。

これは人間の作り出す宗教の姿です。自分の理解を超える出来事や、望ましい結果が与えられると、神として祭り上げます。またその方法も自分たちで考えます。神が本当におられるか、どんなお方か、何を喜び受け入れられるのかはわかりません。

神が自然界を通してご自身をいくらかお示しくださっていることは、聖書にも記されています。ただ、人間が勝手に神を考え出しても、まことの神の姿や性質とは大きく違っていました。

二、まことの神を示す

自分たちを神々として祭り上げようとする人々を、パウロとバルナバは必死に止めました。それは、人々の間違った理解を正すためであると共に、自分たちも間違った歩みに入らないように気をつけていたからです。確かに不自由だった足が全くだされたのですから、少しは

自分の手柄にしたり、人から評価されたいと思うかもしれませんが。しかし、パウロにとって、自分がほめられようとするのは、神から心を離れさせようとする誘惑でした。

聖書には、自分を誇ったり高ぶったりしたために、王位を失った人や、虫にかまれて息絶えた人などが、何人も登場します。ほめられようとか、人よりも神に近づこうとする誘惑の先が滅びに結びついている以上、二人は必死に人々の行動を止めなければなりませんでした。

善意から出たものであっても、基準が人間の思いであれば、本当によい実を結ぶとは限りません。収穫に対する感謝も、種を蒔く人、世話をする人、刈り入れをする人、運ぶ人と、様々な働きがあつて届けられていることも感謝ですが、世界の創造主であり、命の源であるお方に正しく向いて、感謝を表すことを忘れてはなりません。

三、救い主が来られた

神は自然界の恵みを通して私たちを祝福し、また時には私たちの祈りに応えて常識を超えた解決に導かれるお方です。しかし、救い主キリストによってそれ以上に、さらに豊かな恵みである、罪の赦しと永遠の命を、また生ける神との交わりの中に、喜びがいつもある歩みを与

えてくださいました。

《過ぎ去った時代》とは、キリストが来られる前の世界であり、キリストを知るまでの私たちの人生です。まだはつきりとキリストを知りませんが、漠然と神への思いを持ち、善悪の判断をしてきました。その時には精一杯のことでした。

しかし、今はイエス・キリストによってまことの神を知ることのできる時代です。人間によって選ばれ、ほめられる神ではなく、私たち一人一人を選び、喜べで満たそうと願っておられるお方がおられるのですから、以前の歩みは「過ぎ去って」います。

自然界に雨が降り、恵みの季節が来て喜びにあふれるように、私たちの人生にも、神は時に応じて恵みを注ぎ、実りの季節をもたせると約束しておられます。自然界の恵みへの感謝だけでなく、日々私たちと共におられる神との交わりに感謝しましょう。心が喜びで満たされます。

結論

私たちに命を与え、日々の食物を与えて支えてくださっている神様の恵みに感謝しましょう。

研究資料

(小平徳行)

テキスト

8 ルステラ イコニオムの南西40kmに位置し、AD6年アウグスト帝によってローマの征服植民地となった。BC3世紀にヨーロッパのゴール人(ガリヤ人)が大量移住したが、ここの住民はその子孫である。ゴール人は非常に迷信深い異教徒であった。本書ではルステラにおけるユダヤ教の会堂について言及されていないことから、ユダヤ教の影響のない町であったと考えられる。**彼は生れながらの足なえて** この事実の強調は、こゝでなされた癒しが全く神による奇跡であることを示すためである。

9 いやされるほどの信仰が彼にあるのを認め パウロの語る福音を聞いて、この男の内にはイエスを神の子と信じる信仰の種が蒔かれていた。パウロは彼が熱心に耳を傾けている様子から、彼の中に信仰の純粋さと真実さを見てとつたのであろう。救いも癒しも信仰が必要である。

11 ルカオニヤの地方語で 普段はギリシヤ語を話すことができたが、この奇跡にあまりにも驚き、この地方語

で叫んでしまったのであろう。パウロたちは彼らの話している言葉を理解することができなかったたので、目の前で起きている事態を把握できなかったが、やがて彼らの行動からすべての事を理解することができた。

12 バルナバをゼウスと呼び、パウロは…ヘルメスと呼んだ バルナバは年長者であつたためギリシヤ神話の主神であるゼウスと呼ばれ、パウロは雄弁であつたゆえにヘルメスと呼ばれた。ヘルメスはゼウスとマイヤの間に生まれた子で、神々の使者である。この宗教的熱狂の背景として考えられるものにローマの詩人オビッドによる伝説がある。それによると、ゼウスとヘルメスは人間の姿をとつてガラテヤ地方に来て宿を乞うたが誰も彼らを迎え入る者がいなかった。その時、貧しい家の老夫婦が彼らを招き入れてもてなした。彼らは感謝をこめて、この老夫婦に報酬を与え、不親切だった人々は皆滅ぼされたという。ゆえに癒しの奇跡を見たルステラの人々はパウロとバルナバをゼウスとヘルメスの再来と考え、彼らにいけにえをささげようとしたのかもしれない。

14 自分の上着を引き裂き 事は重大であつた。バルナバとパウロは偶像にされ、礼拝されようとしていること

が分った。上着を引き裂くことは、嫌悪と恐れを身振りで示し、群衆の意図していることに対する最大限の抗議であつた。パウロらは神に対する冒瀆に敏感であり、決して自分たちが神に祭り上げられることをよしとしなかった。人間の偶像化は断じてあつてはならない。ペテロもコルネリオが自分を拝もうとするのを断固断つた(10・25〜26)。しかしヘロデは民衆が自分を神に祭り上げようとするのを制止しようとしなかった。そのため、彼は神に打たれたのである(12・22〜23)。

15〜17 これは緊急事態に対応するために語られたものであるが、17章のアテネでの説教と共に、異邦人に語られたメッセージとしてパウロの異邦人に対する関心や考え方が表れている点で注目すべき所である。わたしたちとても、あなたがたと同じような人間である。まず自分たちが町の人と同じように生きている人間であるという事実から語った。人間は人間であつて神ではないこと、つまり、人間を神格化する偶像崇拜の否定から説いた。あなたがたがこのような愚にもつかぬものを捨てて、すべてのものをお造りになつた生ける神に立ち帰るようと、福音を説いている。異邦人への伝道は、偶像崇拜

から離れて、生ける神に立ち帰るように語り伝えることからにはじまる。異教徒はまず神の唯一性と本性について教えられねばならない。特に真の神は創造主であることを、自然における啓示(一般啓示)から語っている。そして憐れみと忍耐、寛容の神(16)、恵みの神(17)であることが語られている。ご自分のことをあかししないでおられたわけではない。作物の収穫に至るための様々な要因は、神の恵みをあかしするものである。これは異教国での伝道の切り口となる。

収穫感謝礼拝はアメリカのサンクスギビングデーから来ているが、収穫を感謝する祭は世界各国にある。日本では同時期の11月23日に「勤労感謝の日」があるが、これは戦前は「新嘗祭」と呼ばれ、五穀豊穡を感謝する皇室祭祀であつた。植村正久は皮相的ではあるがキリスト教の土着化のために「新嘗感謝礼拝」を行った。

参考図書 斎藤篤美「使徒行伝」『新聖書註解・新約2』(いのちのことば社)、F・F・ブルース『使徒行伝』(聖書図書刊行会)、油井義昭『福音の広がり―使徒の働き講解説教』(一粒社)、土肥昭夫『天皇とキリスト』(新教出版社) 他

聖書 使徒14・8～18

タイトル 神様、感謝します！

暗唱聖句 食物と喜びとで、あなたがたの心を満たすなど、いろいろのめぐみをお与えになられているのである。

使徒14・17

目標 日々の食物を与えてくださる神様の恵みに感謝する。

導入 (飯田勝彦)

私たちは、たくさん恵みを受けて生活しています。どんな恵みがありますか。考えてみるのも良いですね。恵みが分かると心に感謝があふれてきます。感謝は、私たちの心を豊かにしてくれるので大切なものです。また、感謝の心がある人は、周りの人に幸せを分けることができます。これからいっぱい感謝を表していきましょう。

神様は偶像礼拝を喜ばれない

今朝の箇所は、ルステラでバルナバとパウロが伝道した時のことが記されています。パウロは、神様から受けた素晴らしい恵みで心が感謝に満ちあふれていました。

だからこそ、神様に感謝すると同時に、多くの人に恵みを知ってもらいたいと思い一生懸命に伝道したのです。

ルステラの町に入った時、足の不自由な男性に会います。パウロは、その男性を癒しました。今まで一度も歩

いたことのない男性が踊り上がって歩き出したのです。

するとそれを知った人たちは「神々が人間の姿になって降りてきた」と言って、パウロとバルナバを神様とし、

いけにえを献げようとしたのです。自分たちが神様として拝まれようとしていることを聞いたパウロたちは、す

ぐにそれを止めさせました。真の神以外のものを神様とするのは偶像礼拝になるからです。偶像礼拝は、神様が

一番嫌われることです。

神様は生きておられる

パウロたちは、自分の着ている服をやぶり、彼らの集まる中に入って行きました。服を破ることは、猛烈な抗議を表す行為です。パウロたちは、自分たちが神様にされ、またルステラの人々が偶像礼拝をすることに対して、いたたまれない思いになったのです。パウロたちは「皆さん、なぜこんなことをするのですか。私たちは皆さんが偶像礼拝から離れて、生ける神様に立ち帰るために、

福音を伝えているのです。私たちが伝えている神様は、天と地と海と、その中にあるすべてのものを造られたお方です」と叫んで訴えました。

私たちの周りでも人間を神様にして拝んでいる人が多くいます。でも、人間は罪人で神様ではありません。私たちは人間や動物を神様にしていることがあります。また木や石などを使って神様を作っています。年末になると一年の間に溜まったホコリを取ってもらう神様もいます。これって何かおかしくありませんか。

私たちを生かす恵みを与えてくださるのは、私を造られて、生きておられる神様です。

神様は私たちに恵みを与えられる

「神様がいて、実際に生きているならその神様を見た」と思ったことがあるでしょう。でも、神様は霊ですから、肉眼で見えることはできません。でも、神様はちゃんとおられることを多くのことを通して私たちに教えてくださっています。

今は秋です。日本の季節には四季があり、それぞれの時期に素晴らしい果物や野菜ができます。春はイチゴ、夏はスイカ、秋はナシ、冬はミカンなど。まだまだ沢山

あります。これもすべて神様が私たちに与えてくださった物です。

そして、私たちはその豊かな実を食べることで「うわぁ、おいしい!」と喜びます。普通のことのようですが、実はこの喜びも神様が私たちに与えてくださったものなのです。今日の聖句を読みましょう。「食物と喜びとで、あなたがたの心を満たすなど、いろいろのめぐみをお与えになっているのである」。

みんなは毎日、美味しい食事を喜んで頂いていますね。それは、目で神様を見ることができなくても、神様を毎日体験していることになるのです。

まとめ

皆さんが本当の神様を知って、目を向け、神様に感謝することを神様は待ってられます。私たちの周りには、たくさん恵みで囲まれています。恵みを数えてみましょう。そしていつも神様への感謝を忘れないでいきましょう。

♪神さまかんしゃします♪

(ホ119)

聖書 イザヤ40・27～31 テーマ 主を待ち望む者の力

序論

(金井信生)

イザヤ書は40章から新しい区分に入ります。すなわち、バビロンに捕囚され、苦難の中にある神の民に、救いを告げる呼びかけが届けられます。このメッセージは、やがてイエス・キリストによって、全人類に罪の奴隷からの解放を告げる福音としてわたしたちにも届けられています。主キリストを信じる者は、うつむきの歩みから、救い主を仰ぎ見て前進する新しい力が与えられるのです。

一、神との交わりが回復される

神の民が力を失った最も大きな原因は、神との交わりを失ったからです。神を求め、呼びかけても答えを得られずにつぶやいていました。

しかし、「慰めよ、わが民を慰めよ」(40・1)との主の言葉が、私たちに届きました。それはただの声ではなく、イエスによってもたらされた、現実の慰めです。人間を苦しめる罪の束縛に、イエスは赦しゆるを与え、勝利を

与えてくださいます。また牧者となって私たちを抱いてくださっています。これらは、私たちが天の神と交わりを回復し、またいつも保つていくためです。キリストの救いの言葉を聞き、イエスの名によって祈る、日ごとの交わりが私たちを内側から力づけます。

もはや、(わが道は主に隠れている)、(わが訴えはわが神に顧みられない)と嘆くことはありません。つぶやきの言葉を捨て、「神様、あなたを信じます。あなたに感謝します。あなたを賛美します」と告白するとき、力の源であるお方から私たちの心に新しい力が注がれてくるのです。

二、主にのみ望みを置く

神の民イスラエルが国を失い、苦難の道に陥ったのは、ただ侵略されたからではありません。聖書は、主に信頼することを怠って、北のアッシリアやバビロン、南のエジプトの繁栄に心惹かれ、それらの国々の偶像を拝むようになったからだと指摘しています。地上のどんな華やかさも勢いも、主の創造の力の前には何ほどでもありません。

〈主を待ち望む〉とは、二心でなく、ただまことの神

だけを頼りとしていくことです。「主の目はあまねく全地を行きめぐり、自分に向かつて心を全うする者のために力をあらわされる」(歴代下16・9)と約束されています。主に立ち返るだけでなく、一つ心になるまでに主に沿わせていただきますよう。

また、今は榮えているように見える国も権力も、いずれは衰えます。これに頼っていた者も同じように滅んでいきます。しかし、主は「弱ることなく、また疲れること」もないお方です。世は変わり、人は移りゆきますが、主を待ち望み、主に結ばれていると、惑わされないで、しっかりと立ち、歩むことができます。

三、わしのように翼をはって、のぼる

信仰者がわしにたとえられている箇所は、他に「こうしてあなたは若返って、わしのように新たになる」(詩篇103・5)と、羽が新しく生え変わってさらに高く飛ぶ姿が描かれています。またこのイザヤ40章では、力強く天に向かつて羽ばたく姿として、信仰者の歩みが教えられています。

ここに「飛ぶ」、「走る」そして「歩く」とあります。普通は歩き、走り出して飛ぶのですが、この順序には慰

めがあります。信仰者も人間ですから、時には「弱り」、「疲れ」ることもあります。これまでなら、弱さを感じるとますます落ち込んでいましたが、主を待ち望む人は、自分の弱さにも惑わされないで、最後まで主に支えられて歩み続けることができます。

試練のときさえも、古い羽が抜け落ちて新しい羽に変わっていくための時として、希望を持って忍耐することができます。その中で神様の言葉に養われ、神様の時を待つならば、今まで以上に神様の恵みを知り、さらに力強く生きることができます。

イザヤが苦難の時代に向き合いながら、救い主を待ち望むように伝えたメッセージは、世の終わりに向かつて信仰の戦いを走りぬいていく私たちに、再臨の主に迎えられる日を待ち望むよう励ましています。

結論

「上にあるものを求めなさい」(コロサイ3・1)、「幻のない民は滅びる」(箴言29・18英訳)と、聖書は示しています。待降節の日々、救い主を待ち望んで、新たな力をいただきますよう。

研究資料

(小平徳行)

本書は39章までの前半と、40章以後の後半とに分けることができる。前半は神のさばきのメッセージ、後半は神による回復のメッセージである。これはバビロンからの解放にとどまらず、神の民の罪からの根本的な救い、キリストによる贖い、終末におけるキリストの再臨に伴う救いの完成までが遠望されて語られている。

テキスト

本章ではイスラエルの民に対し、バビロン捕囚からの解放が近づいていることを伝える慰めのメッセージが語られている。イザヤがこれを預言した時には、神の民はまだバビロンに捕えられていなかった。しかしこの約200年後に実現する。

27 神への信頼が欠如し、失望落胆してつぶやく神の民への叱責である。**ヤコブ**よ 神の民の総称。神の祝福の担い手であったイスラエル民族の先祖ヤコブの経験を想起して、信仰の弱い者、自分の知恵と力で事態を切り開こうとして、主への信頼に欠ける者、それにもかかわらず主のあわれみを受ける者の典型として神の民をこのように呼んだ

のであろう。**わが道は主に隠れている** 自分たちが今直面している困難に対し、主は無知、または無関心であり、目を留めていない、という不満。**イスラエルよ ヤコブと**同様、神の民の総称を示す語であるが、神の約束と選びの面が表わされたものである。**わが訴えはわが神に顧みられない** 苦難からの救いを求める私の主張、私の申し立て、言いつ分を神は無視し、顧みられないとのつぶやき。**訴え**(**ヘミシュパート**)はイザヤ書で42回用いられている。もともと「さばく」(**ヘシャーファト**)に由来する。ゆえに第一の意味は裁きである。他に公正、義(公義)の意味がある。ここで民は、契約に基づいて、正しい訴えをしていると、自分の正しさを主張している。

28 **あなたは知らなかったか、あなたは聞かなかったか** 21節と同じように問いかけ、信仰の原点を思い起こさせようとしている。民は自分たちが神に忘れられているとつぶやいているが、むしろ民の方が、神が全知全能であることを忘れ、あるいは疑っているのである。**主はとこしえの神、地の果の創造者であって** 主のご支配は過去、現在、未来を通じて一貫しており、それは全世界に及んでいる。主が創造者であることは12〜26節にすでに述べられており、こ

こで更に念を押している。主は創造者であり、異教の神々などとは比べることのできない圧倒的に力あるお方である。ゆえに神が弱ったり疲れたりして、ご自分の民を見捨てることなど決してない。神が創造者であることと救済者であることは密接に結び付いている。その知恵はかりがたい。人間の思いはあまりにも小さすぎて神の思いを理解し神の意図を判断することはできない。

29 弱った者には力を与え 主は弱ることがないだけでなく、弱った者に力を与えることのできるお方である。しかも、ここでは分詞形が用いられており、いつも与え続けるということ。したがって、信仰者は弱い時にこそ強いと言うことができる(Ⅱコリント12・9～10)。

30 年若い者も弱り、かつ疲れ、壮年の者も疲れはてて倒れる 年輪的に、活力的に盛りの時であっても、生来の力は消耗してしまう。これは人間の力の限界を示している。壮年の者 成熟した若い男。「選ばれた者」が原意。戦いや働きのために選ばれた者であり、最も成熟して力がある者のこと。

31 待ち望む(ヘクアーヴァー) 「信じる」と同義。確かな期待や信頼を持って忍耐して待つことを意味する。新たな

なる力を得 交換する、回復する、更新する、再び隆盛を極めさせるなどの意味がある。人間の力を神の力と変える時、新しくされ、回復する。わしのように 鶯は人里離れたところに住み、強く天に向かつてのぼるので、神の力を受けて歩む信仰者にたとえられている。翼をはって、のぼる 鶯は空を飛ぶ時、自分の翼を上下にはばたかせるのではなく、帆翔飛行、つまり翼を張り、上昇気流にゆだねて舞い上がる。このことにより、羽ばたきより長時間の飛行が可能となる。もう一つの解釈の可能性は「翼を生やす」である(七十人訳、ウルガタ)。鶯は翼の羽が生え換わり(換羽)、力が新たにされるのである。

キリスト者は主の前に静まり、主を待ち望む時に、主からの力によって立ち上がり、新たにされ(詩篇103・5)、歩み続けることができる。これはバビロンからの帰還に伴う主の支えの約束であるだけでなく、主に信頼し、主を待ち望む者すべてに力を与えられるとの約束である。

参考図書 鍋谷堯爾「イザヤ書」『新聖書註解・旧約3』(いのちのことば社)、樋口信平『イザヤ書Ⅳ注解「4」』(一粒社)他

聖書

イザヤ40・27～31

タイトル

イエス様を待ち望む

暗唱聖句

主を待ち望む者は新たな力を得、わしのように翼をはって、のぼることができ
る。
イザヤ40・31

目標

主を待ち望むことによる力を経験する。

導入

(飯田勝彦)

12月に入りました。12月と言えば、クリスマスですね。今日から御子イエス・キリストのご降誕を待ち望む待降節（アドベント）に入りました。これから日曜日ごとに教会のキャンドルの灯が増えて行きます。クリスマスが近づくにつれて、救い主イエス・キリストを待ち望む私たちの祈りの火も熱くされたいですね。

私たちが信じる神様

皆さんのほとんどがクリスマスを知っていると思います。クリスマスのために前もってプレゼントをお願いしたり、ケーキを予約したりといろいろな準備をします。最近では、早くも11月頃からクリスマスツリーが飾られているのを見たりします。

でも、クリスマスは知っていてもクリスマスの意味をどれだけの人が知っているのでしょうか。イエス・キリストは神様の独り子であり、父なる神様が私たちのために遣わして下さったお方です。父なる神様とイエス様は切り離せない関係です。

さて、私たちのためにイエス様を遣わして下さった神様は、どんなお方でしょうか。それは、とこしえにられるお方です。父なる神様は永遠の昔から永遠にまで存在されるお方なのです。頭では想像できないことです。が、神様は時間や歴史を越えて今も生きておられる神様です。

また、神様は天地を造られたお方です。私たちが目にする太陽、月、星、また地上での空気も植物も、私たち一人一人も皆、神様によって造られているのです。その神様は弱くなったり、疲れたりされません。いつまでも私たちのことに心を配って愛しておられます。このような神様を信じることができるとは、何と幸せでしょう。

私たちが回復される神様

永遠なる神様、天地を造り私たちをも造られた神様は、すべてを知っておられます。私たちがどのようなことで

悩み、困っているかをご存知です。神様は私たちのことを、ただ知るだけでなく私たちの心のすべてを分かかって下さり、受け止め支えて下さるお方です。皆さんも、学校でいろいろなことがあるでしょう。悩んで友だちに相談したことがありますか。友だちが聞いて励ましてくれたら、心が安心するでしょう。

そのように神様は、私たちのすべてをしつかりと聞いてくださり、弱った者に力を、勢いのない者には強さを回復して下さいます。神様は私たちを回復させて下さって、元氣にして下さるお方です。私たちはお祈りの中で、神様に打ち明けて、頼ることができるのです。

私たちに力を与える神様

多くの人たちがクリスマスを楽しむにしているのは、プレゼントや友だちたちと楽しく遊べる時があるからです。楽しみなことがあると、目の前の嫌なことも乗り越えることができます。でも、楽しみがなければどうでしょうか。「絶望した」という言葉を聞いたことや、使ったことがありますか? 「絶望」とは、まったく希望がなくなることですね。長いトンネルの中を通るとき、真っ暗な中に出口から光が見えてくると「もうすぐ外に出られ

る!」と暗いトンネルも我慢できます。先に見える光が希望となります。

今、皆さんには希望がありますか? 学校でのいじめ、友だちとの関係、勉強のこと、親や兄姉とのこと、将来のことなどいろいろ考えると「希望よりも辛いことが多いよ」と言う人もいるかも知れません。

でも、神様は私たちに大きな希望を与えて下さっています。それは、救い主イエス・キリストです。イエス様は、私たちの苦しみや悩み、不安などをすべて解決するためにクリスマスに來られた救い主です。このイエス様を信じ待ち望む人には、神様が新しい力を与えて下さいます。その力は、いろいろな問題を粘り強く乗り越えて行く力です。

まとめ

私たちに回復と力を与えて下さるイエス様を祈りながら待ち望みましょう。

♪すくいの主イエスに♪

(ホ 95)

聖書 黙示録22・12・21 テーマ 再臨の主を待ち望む

序論

(金井信生)

キリストはもう一度この世に来られます。これを「再臨」といいます。旧約時代に、神の民がメシヤ(救世主)の来臨を待ち望んでいたように、私たちはキリストの再臨を待ち望むのです。

一、主の言葉に基づいて

福音書や使徒行伝では、イエスの弟子たちが数々の旧約聖書の言葉を引用して、ナザレのイエスこそ預言されていたメシヤであることを証しています。イエスの誕生からはじまって、告げられた福音の言葉、いやしの奇跡、受難、そして十字架と復活は、預言されていた主の言葉がその通りに実現したものです。

天に昇られた主は、使徒ヨハネを通して、「見よ、わたしはすぐに来る」と約束されました。この言葉も必ずその通りになります。また、旧約聖書に記されていて、まだ実現していない、メシヤについての預言もすべて成就します。主が全地の王となられること、すべての罪と

悪が滅ぼされること、今ある世界に代えて神と人が共に住む楽園が回復されることなどが、キリストの再臨によって、すべて成就していきます。

主の計画の詳細あるいは順序について、私たちに知らされていないことはたくさんあります。しかし、再臨と新天地の約束をされたのは、私たちを愛し、命を捨てて救い出してくださったお方です。だから、「アアメン、主イエスよ、きたりませ」と、祈りをもってキリストの再臨を待ち望むのです。

わからないからといって、勝手に「書き加える者」や「とり除く者」にならず、私たちが罪と滅びから救われて神の子とされ、永遠の命に生かされるために、また罪の世にあつて信仰の生涯を終わりまで全うするために必要な一切は、聖書を通して教えられていることをおぼえましょう。

二、「初め」と「終り」

永遠者であるキリストは、「わたしはアルパであり、オメガである。最初の者であり、最後の者である。初めであり、終りである」と名乗られます。永遠者であり、今私たちが住むこの世界を無から創造して「初め」を与え、

やがて「終り」を告げて新しい天と地を創造されるお方です。またキリスト者にとっては「信仰の導き手（創始者・新改訳）であり、またその完成者」（ヘブル12・2）とあるように、地上における信仰の生涯を始めさせてくださり、やがて御国に帰る時まで守り支えてくださるお方でもあります。

さらに、キリストの再臨は、（いのちの木にあずかる特権を与えられ、また門をとおって都にはいるために、自分の着物を洗う者たち）すなわち救われている者にとつては、永遠の御国に住む初めであり、地上での苦しみや悲しみが終わる時です。

しかし、（犬ども、まじないをする者、^{かんいん}姦淫を行う者、人殺し、偶像を拜む者、また、偽りを好みかつこれを行う者）、すなわち最後まで主を畏れず、^{おそ}救いを拒み続ける者は（外に出され）、永遠の断絶が待つばかりです。

創造主であるまことの神を知らず、救い主キリストを信じなければ、人生の意味も目的もわからないままです。しかし救われると、世界の初めと終わりの、人生の初めと終わりの、主の手に治められていることを知り、^{ゆだね}委ねて平安を得ることができます。「初め」と「終り」を知る

ことは大きな幸いです。

三、いのちの水をいただいて

聖書は、最後まで不信仰に対する警告が記されています。子どもが学校に行く時に、忘れ物はないか、事故に遭わないようにと細かく口出しする母親のように、私たちを大事にしてくださいとささっている主の思いがあふれているようです。

再臨はまだ来なくても、「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい」（ヨハネ7・37）、「わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがる」（ヨハネ4・14）と約束された主イエスは、（いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい）と、すでに私たちに、心の内からあふれる豊かな恵みを日々与えてくださっています。

救い主を喜びたたえながら、一步一步を主と共に歩み続けること、それが再臨への備えです。

結論

（すぐに来る）と約束された主に（アアメン、主イエスよ、きたりませ）と心から答え、再臨の主を待ち望む者となりましょう。

研究資料

(小平徳行)

アドベントとは「到来」を意味するラテン語「アドベントゥス」から来ており、「キリストの到来」を表わす。これはキリストの初臨と再臨の両方を指している。この期間を通して私たちは主イエスの再臨を待ち望む者であることを確認する。

テキスト

12 それぞれのしわざに応じて報いよう 行いに応じた裁きは、新約を通して主張されている(Ⅱコリント5・10等)。報い(ギ)ミスソスは当然払われるべきものを意味する。これは不義なる者への最後の審判の警告であり、信仰者に対しては、自分の着物を洗った者(14)として信仰から来るわざを行った者への祝福ある報いである。

13 わたしはアルパであり、オメガである。最初の者であり、最後の者である。初めであり、終りである。これはイエスが万物より先に存在しておられ、御父と等しく神であることの自己証言である(コロサイ1・17参照)。イザヤ44・6、48・12でも用いられており、神の完全性、

永遠性を示す。これによってイエスが歴史の支配者であり、本書で明らかにされた神のご計画は必ず実現することと断言している。

14 いのちの木 本書には4回出てくる。これは神の都にあり、かつては罪のゆえに近付くことができなかったが(創世記3章)、キリストにある勝利者があずかることができる(2・7)。これは永遠のいのちがもたらす祝福と特権(神の子の嗣業)のすばらしさを象徴するものである(22・2)。墮落以来、人間があずかり知りえなかった喜びが、贖い(あか)のゆえに、永遠の所有となるのである。自分の着物を洗う キリストの犠牲を自分のものとして受け入れること。キリスト者は主イエスの血潮により、一度限り全ての罪を赦(ゆる)された者である(7・14では「洗う」という動詞は不定過去時制)。ここでは現在形が使われており、継続的に洗うことを示している。私たちは、日々この世で生活する上で汚れる者であるゆえに、継続的に洗うことが必要である。

16 ここに出ているイエスの称号は旧約の預言の中にその起源をもっている。ダビデの若枝 若枝(ギリザ)は新約聖書ではほとんど「根」と訳されている語である。

ちなみに新改訳では「根」、新共同訳では「ひこばえ」（樹木の切り株や根元から群がり生える若芽のこと）と訳されている。旧約では「エッサイの根」と呼ばれた（イザヤ11・1、10）。この称号は続く（ダビデの）子孫とあわせて、キリストが正統なダビデ王家の後継者であり、約束されたメシヤとして神のご計画を実現するお方であることを示す。**輝く明けの明星** 長きにわたる暗やみは終わり、夜明けが来ることの保証である。民数記24・17のメシヤ預言に通じる。諸教会の苦難を知るヨハネにとって、流刑地であるパトモス島で、将来における創造と歴史の究極的な完成の様を見せられ、約束の言葉を聞かされたことは、大きな励ましとなったであろう。

17 御霊も花嫁も共に言った 花嫁は花婿の到来を熱心に待ち望む点で、キリストの再臨を熱心に待ち望む教会と重ね合わせるのに適している。御霊は教会のうちにあって切なるうめきをもつてとりなしている（ローマ8・26、27）。**きたりませ** 「わたしはすぐに来る」と言われるイエスに対する応答として、すみやかに再臨されるように願っている。また、この書のメッセージを聞く者がすべてがイエスの再臨を待ち望む祈りに加わるよ

うにと勧告している。御霊はキリスト者をキリストの花嫁として仕立てるのである。**かわいている者はここに来るがよい** 私たちはキリストの再臨を願うと共に、罪人に対してキリストに立ち帰るように招く使命が与えられている。

20 アメン、主イエスよ、きたりませ 再臨の約束の宣言の後に、キリスト者の待ち望みの言葉が続く。再臨の期待は自然に起こるものではなく、キリストの約束に根拠づけられている。こうして黙示録は恐怖の念ではなく、強い願望と期待を持って終わっている。これは真のキリスト者がいなく気持ちを反映させているといえる。

21 結びの祝祷は書簡に多く見られる。本書は黙示的、預言的であるが、書簡の文書形態をとっている。ヨハネはすべてのキリスト者が、神の惜しみない恵みに依存していることを思い起こさせて、黙示録を閉じている。

参考図書 鈴木英昭『ヨハネの黙示録』『実用聖書注解』、レオン・モリス『ティンデル聖書注解ヨハネの黙示録』（以上のちのことば社）、森山諭『ヨハネ黙示録に見る七つの秘義』（荻窪栄光教会出版部）、メルル・C・テニイ『ヨハネの黙示録』（聖書図書刊行会）他

聖書 黙示録22・12～21

タイトル 再び来られるイエス様

暗唱聖句 アアメン、主イエスよ、きたりませ。

黙示録22・20

目標 再臨の主を待ち望む者となる。

導入

(松浦みち子)

アドベントクランツに二本のろうそくが灯りましたね。クリスマスを待ち望むと共にイエス様が再び来られるのを待ち望みましょう。

天に上られたイエス様

イエス様は十字架で死なれたのちに三日目によりがえり弟子たちに復活の姿を現され、大切なお話をされました。40日が過ぎたとき、多くの人々の目の前で天に上って行き、雲につつまれてその姿が見えなくなりました。その時ふたりの天使が、「みなさん、なぜ天を仰いで立っているのですか。天に上げられたイエス様は、今あなたがたが見たのと同じように、またおいでになります」と告げました(使徒1・11)。

イエス様の再臨

イエス様が再びおいでになることを「再臨」と言います。イ

エス様は「見よ、わたしはすぐに来る」(7)と約束されましたが、いつ来られるのでしょうか。ある人々は、「主の来臨の約束はどうなったのか。…すべてのものは天地創造の初めからそのままであつて、変つてはいない」(Ⅱペテロ3・4)と言います。私たちにとっても二千年以上の約束です。イエス様は約束をお忘れになったのでしょうか? いいえ、イエス様はひとりも減びることがないようにと忍耐しておられるのです。その時がいつであるかは誰にも告げられていません。イエス様は突然、思いがけない時にやって来られます。イエス様はある結婚式のお話をされました(マタイ25章)。十人のおとめが花婿を迎えるために待つていたのですが、思慮深い五人はともし火のほかに別の入れ物に油を用意していました。けれども他の五人は予備の油を用意していませんでした。思いがけず花婿の到着が遅れてしまつてみな居眠りしてしまいました。すると夜中に「さあ、花婿だ、迎えに出なさい」という声がしたのです。それを聞いて、みな飛び起きたのですが、ともし火が消えかかっています。用意のない五人は「さあ大変」と油を買いに行きました。けれどもその間に花婿が到着し祝宴が始まつてしまい、買い物から戻つてきた時には、扉は閉められており、中に入ることができませんでした。「だから、目をさましていなさい。その日その時

が、あなたがたにはわからないからである」(マタイ25・13)。

では、イエス様は何のために来られるのでしょうか。この世をさばき、ひとりひとりの行いについて報いを与えるために来られるのです。イエス様はご自分のことを、「わたしはアルパであり、オメガである。…初めであり、終りである」(13)とあかしされ、天地創造以前からおられて永遠に至るまで世界を支配する神であることを明らかにされました。また、ダビデの若枝、子孫としてベツレヘムの馬小屋に誕生され、私たちを罪から救い、神の国に入れるための道を開いてくださいました。また、輝く明けの明星のように希望の光となつて人々をいやし、励まし、力づけて下さいました。そして「かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」(17)と、ずっと招いておられます。

聖書の最後のいとは

この世界は、神に属する者と属さない者との二つのグループに分かれています。やがてこの世は閉じられる時がきます。この「世の終わりが近づき、患難と迫害の時が迫っている」という事実は変えることができません。これは罪に満ちた世界に対する神様のご計画だからです。神様は聖書の第一ページ目の創世記から黙示録の最後のページに至るまで、私たちに対する愛を

示しておられます。聖書を通してあらかじめ、神様のご計画を明らかにし、その日に備えるようにと教えて下さっているのです。黙示録の預言の一番大切なことは、あなたがどちら側にいるかということです。

聖書は次のことばで閉じられています。「もしこれに書き加える者があれば、神はその人に、この書に書かれている災害を加えられる。また、もしこの預言の書の言葉をとり除く者があれば、神はその人の受くべき分を、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、とり除かれる。これらのことをあかしするかたが仰せになる、『しかし、わたしはすぐに来る』。アアメン、主イエスよ、きたりませ。主イエスの恵みが、一同の者と共にあるように」(18・21)。

黙示録を通して神のさばきと警告を知ると共に、クリスチャンが終わりに受ける祝福を知って励まされますね。「(天の) 都にはいるために、自分の着物を洗う者たちは、さいわいである」(14)とあります。イエス様の血潮で罪、汚れが洗い清められ、キリストの花嫁として迎えられるとはなんと素晴らしいことでしょう。「主イエス様、来てください」と、主の再臨を心から待ち望みましょう。

♪青い空より♪

(ホ123、イン102)

聖書 ヨハネ1・1～5、9～14 テーマ すべての人を照らす光

序論

(福井文彦)

クリスマス之夜、大きな星がひときわ輝いたという出来事は、私たちに心温まる思いを与えてくれます。ヨハネは、福音書の冒頭で〈すべての人を照すまことの光があつて、世にきた〉と、キリストの誕生を紹介しています。この光であるキリストを信じ受け入れるとき、私たちは新生し、神の子とされるのです。

一、いのちなるキリスト

ヨハネは、キリストのことを〈初めに言があつた〉と、「キリスト」と言わないで、「言」と表現しました。当時、すでにキリスト教がユダヤ人の間だけでなく、異邦人の間にも広がっていました。ですから、彼らには、「言」すなわち「ロゴス」の方がよく理解できたのです。

この「言」であるキリストは、〈初め〉から存在されたお方でした。それは、時間の最初、歴史の最初という意味ではありません。時間が始まる以前、つまり創造のみわざを開始されたその時からご存在されたお方でした。

(3)。このキリストは〈神と共にあつた〉お方です。すなわち、キリストは永遠の神であり、父なる神と永遠の交わりの中におられたお方なのです。

〈この言に命があつた〉とは、単なる法則や原理のようなものではありません。この命は、肉体的命、霊的な命、永遠の命です。キリストを信じるとき、命が与えられ、死から命へ移されます(ヨハネ5・24)。〈そしてこの命は人の光〉でした。〈やみはこれに勝たなかつた〉のです。闇の中に光が差し込んでくると、闇は姿を消します。しかし、光の中に、闇は入ることはできません。闇が光を駆逐することはできないのです。

二、光なるキリスト

〈すべての人を照すまことの光があつて、世にきた〉とあります。キリストの来臨は、私たちに神を現わし、啓示するためでした。光は物を照らして見えるようになります。そのように、光なるキリストによって、心の目が開かれて、彼を通して、神がはつきりわかるようになるのです。

また、キリストは、闇の中にいる者に光を与えます。ヨハネによる福音書には、光を与えたイエスの業が二つ

記されています。その一つは「罪を赦された姦淫の女」(8章)のことで、もう一つは「光を与えられた盲人」(9章)の出来事です。

「姦淫の女」の話は、二重の意味で人間の暗黒を表しています。一つはイエスと女を訴えている群衆で、彼らは自分の罪を棚にあげて、ただ訴えているのです。もう一つの暗さは、罪を犯した女です。彼女は自分の罪が白日の下にさらされて、身の置きどころもなかったと思います。しかし、キリストは彼女に「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい」(8・11)と言われました。キリストの十字架は、今も信じる者の心に、どんな罪も赦される、闇に打ち勝った光として輝いています(5)。

三、キリストを受け入れる者の特権

〈まことの光〉の、〈まことの〉という言葉は、ギリシャ語では「アレーシノス」で、「真実な」とか「本当の」という意味です。キリストは、暗黒の世界に輝く唯一本当の光として来られました。

しかし、この世の人々はキリストがこの世に来られた時、キリストを認めることができませんでした。それは、人間が罪を犯し神から離れているため、キリストを認め

たくなかったのです。別の言い方をすれば、霊的に盲目な人は、偏見をもっていて、真理に敵対してしまうのです。

ですから、キリストが〈自分のところ〉に来られたのに、ご自分の民は受け入れませんでした。ここで〈自分のところ〉とは「ご自分の国」のことで、イスラエルのことです。それで、イスラエルの民はキリストを信じることなく、十字架につけて殺してしまいました(マタイ21・33〜40)。

しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。〈力〉とは特権(新改訳)、資格(新共同訳)の意味です。たといだれであっても、謙虚にキリストを知り、この世界の主、また自分の救い主として受け入れる人は、神が恵みによって、神の子どもとしての特権を与えてくださいます。

結論

イエス・キリストは、すべてを照らす光としてこの世に来てくださいました。彼は神を現わし、それだけでなく罪を赦し救い、神の子となる特権を与えてくださるのです。

研究資料

(井上義実)

ヨハネが記す神が人となられた受肉、イエスの降誕である。ヨハネの筆致は、簡潔で美しく、詩的である。

テキスト

1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であつた この書き出しに際して、ヨハネの念頭には天地創造の創世記1・1があつたであろう。ヨハネによる福音書の主題は人の新たな創造である。言(ギリゴス) ヨハネはロゴスを普通の会話の言葉としても用い、イエスが語った言葉、神の言葉としても用いている。さらに重要なこととして、ロゴスはイエスそのものである。イエスは受肉した言葉であることをヨハネは独自に述べている。「初めに」という語はイエスの永遠性、すべての前にすでに存在されていた先在性を表している。1節後半は、イエスが神であること、父なる神との人格的な交わりを持つことを記している。ヨハネはロゴスという独自の表現で、キリスト論の根本を最初に提示している。早くも一世紀には、正統的なキリスト論をくつがえすグノーシス派の異端が入り込もうとしていた。今に至るまで異端的なキリスト観は現れ、ま

た消えていく。

3 すべてのものは、これによってできた 創造者は父なる神であると考えがちであるが、創造のわざはイエスとの共働りなされた。神は「光あれ」との言葉を最初に、言葉によって創造の業をなされている。全宇宙は神の言葉であるロゴス、イエスによって創造された。イエスは創造者であり、全宇宙の主権、統治、支配をお持ちのお方である。

4 この言に命があつた 命(ギリゾウエ) 新約聖書で命と訳される語は、ゾウエとプシユケーに大別される。双方共に、様々な意味を持っているが、地上の命を越えた、永遠にいたる神からの命はゾウエに含まれている。イエスは神からの命を持ち、人に分かち与えるお方である。イエスが霊的な命の源泉である。ヨハネは神からの命を巡って、この福音書を記している。この命は人の光であつた 光(ギリフォウス) 聖書は神の栄光の輝きを記す。光は神の本質である。神は光を照らし、光を示すお方である。イエスは光としてこの世に来てくださった。光に従う者に神からの命を与えて、光に生きる者としてくださる。

5 光はやみの中に輝いている ヨハネは霊的な意味合いでのやみを語る。神と離れるならば、やみは深くなる。罪

は暗やみに属し、悪の力はやみの力である。やみはこれに勝たなかった イエスの光は、どんなに深く、濃いやみをも照らす神の光、命の光である。

9 すべての人を照すまことの光 まこと(ギ)アレセイア
真実とも訳される。人についても用いられるが神の本性として多く用いられる。すべての人を照す イエスは全人類を照らす光である。イエスの光は十分であるが、残念なことに光に背向け、光よりも闇(やみ)を愛する者もいる。

10 彼は世にいた。世は彼を知らずにいた イエスがクリスマスにこの世に生まれる以前に、人の目には見えないが世におられたことを示す。もし人が創造された世界、万物の秩序と支配に心を向けるならイエスを知ることができた。

11 彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった イスラエルの民は神に選ばれ、律法が与えられ、恵みの約束の内にあった。預言の成就として、ユダヤに救い主イエスは生まれた。イスラエルの民はイエスを信じることなく、拒み、十字架に付けた。

12 彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々
「自発的、意志的にイエスを信じる者ならだれでも」という

意味である。受け入れることは信じること、信じることは受け入れることである。神の子となる力 力(ギ)エゾウシア 本来、力と訳されるべきではない。特権(新改訳)、資格(新共同訳)の方が正確である。神の子とする力ではなく、神の子とされる特権が語られている。

13 血すじによらず、肉の欲によらず、また、人の欲にもよらず 先祖にだれかを持つということではない。人間的な力でも、努力でもない。ただ神への信仰によって、新生の恵みに与るのである。

14 言は肉体となり 神の言葉である方が、罪以外は、すべてにおいて私たちと同様の人となった。神であり、人である唯一のお方である。宿った(ギ)スケノー 本来、天幕を張るという意味である。他にヨハネ黙示録で四箇所用いられている。わたしたちはその栄光を見た イエスは多くの奇跡をなさったが、特にヨハネが見た山上の変貌(へんぼう)をさすのであろう。めぐみとまことに満ちていた イエスは律法を越えた、恵みの福音という真理を表された。

参考図書 Leon Morris (NICNT), G. R. Beasley-Murray (WBC) 他

聖書

ヨハネ1・15、9、14

タイトル

心を照らしてくださいイエス様

暗唱聖句

すべての人を照すまことの光があつて、

世にきた。

ヨハネ・9

目標

心の闇を照らし、救いきよめるイエス様を、心に信じ受け入れる。

導入

(松浦みち子)

ろうそくの火が三本灯りました。この時期になると、教会でも、町でも、ぴかぴか光る飾り付けをします。あなたのお家でもきれいに飾っているかもしれませんね。最近はびっくりするような光のアートに出くわすことがあります。まるで真昼のように明るく周りを照らし出しています。また、工事現場の光は小さいですが、赤いランプがぴかぴか光って、工事中であることを教えてくれます。光というのは、暗闇を照らし出したり、私たちを危険から守り、行く道筋を示したりします。

神の言なるイエス様

聖書の一番初めには、この世界の初めにあったものが書かれています。何があつたと思いますか? 「闇」だけがあり

ました。その闇に向かって神が「光あれ」と言われると光ができました。神の言葉が発せられて、この世が創造されたのです。「初めに言があつた。言は神と共にあつた。言は神であつた。この言は初めに神と共にあつた。すべてのものは、これによつてできた」(1、3)。この「言」とはイエス様を指します。ですから、この「言」をイエス様に置き換えて読んでみましょう。「初めにイエス様があつた。イエス様は神と共にあつた。イエス様は神であつた」とね。ほら、よく理解できるでしょう。神のことばであるイエス様は天地創造の初めからおられて、この世を造られました。それだけではなく、ご自分の内に永遠の命を持っておられ、その命は人の光でした。イエス様は闇の中で輝き、罪と不信仰のこの世を明るく照らし、人の行くべき道を指し示す方なのです。

闇の中に輝く光

このように、クリスマスに誕生してくださったイエス様は、暗い世界に光として来てくださったのです。イエス様が誕生された、今から約二千年前の人々の様子はどんなだったでしょう。ダビデ王によつて築かれたイスラエル王国は、かつては真の神様を信じ敬う素晴らしい国でした。しかし、いつの間にか人々は神様を信じることをやめ、自分勝手な生活を

始めたのです。その結果、国は滅ぼされ、大国の支配の中で、人々は夢も希望もない生活を送るようになりました。マラキという預言者が、「神様を恐れて歩みなさい。やがて神様のさばきの時が来ます」という神様からのメッセージを伝えましたが、人々は耳を貸そうとせず、わがままな生活をしていたのです。このマラキを最後に預言もやみ、暗黒の時代が四百年も続きました。しかし、やがて時が満ち、ひとり子イエス様がこの世に遣わされました。この方は闇の中に輝く光として世に來られたのです。

イエス様は「神のことば」です。「ことば」を辞書で調べてみると、「人々が思想、意思、感情などを伝え合うためのもの」と記されています。つまり、神様は目に見えないお方ですから、「神のことば」として遣わされたイエス様を通して、ご自身の思想、意思、感情を人々に明らかにするようにされたのです。イエス様は人となられた神様ご自身なのです。

すべての人を照らす光

このイエス様は、すべての人を照らす光です。光は闇を照らし、隠れた罪を暴きます。また、隠れた人の悩みも明らかにされますね。イエス様は光としてこの世に來られ、光として人々と共に歩まれました。世の光として、人々の罪を救し、

病を癒し、涙をふき取ってくださって、生きる希望を与えてくださいました。最後には十字架にかかって身代わりとなって死んで、救いの道を開いてくださいました。その生涯を通して、神様がどんなに恵みとまことに満ちたお方であるかを見せてくださったのです。でも人々は、このすばらしいイエス様が来てくださった時、救い主とは気付きませんでしたし、光のもとに來ようとしませんでした。

もし、あなたが外から帰った時、家に鍵がかかっていて、中に入れないでどうでしょう。自分の家なのに入れないのは情けないし、悲しいですね。イエス様がこの世に來てくださった時、人々の心は鍵がかかっているようで、喜んでお迎えした人は、だれもいませんでした。

あなたの心には鍵がかかっていませんか。神様は、イエス様を喜んでお迎えする人、その名を信じた人々には神の子となる特権が与えられると約束されました。さあ、あなたの心の真ん中にイエス様をお迎えしましょう。「イエス様、どうぞ私の心にお入りください。私の救い主となってください」と。これがイエス様の一番喜んでくださるクリスマスを待つ心なのです。

♪ひかりひかり♪

(こ52、ふ83、イン49、ホ109)

聖書 ヨハネ3・16～21 テーマ 神のプレゼント

序論

(福井文彦)

今日の聖書箇所は、福音書の要約であり、聖書の真理がこれに集約されています。ここに聖書の中の聖書と呼ばれる16節が含まれています。その16節を要約すれば、「救い主キリストを神からのプレゼントとして信じ受け入れるなら、永遠の命を得ることができる」との約束なのです。

一、神は、世を愛された

〈神は…この世を愛して下さった〉と、神の愛の対象は〈この世〉です。〈この世〉とは神の選民イスラエルだけでなく、時代も民族も越えた全人類のことです。その〈この世〉は神に愛されるだけの価値があったのでしょうか。まったくありませんでした。なぜなら、神を知らず、いやむしろ神を否定し、無視し、背を向け、信じない世界が〈この世〉だからです。神を否定し、信じない人間は、神の代わりに、被造物を神と崇める者となり、自己中心性となって表れるのです。

その結果、具体的な罪を犯す者となりました(マルコ7・20～23、ローマ1・28～32)。人は罪を犯すので罪人なのではなく、生まれながらの罪人なので罪を犯すのです。ですから、〈この世〉は「罪の世」であり、「汚れた世」です。その「この世」を、それにもかかわらず、神は愛してくださったのです。ここに無条件の愛を見ます。人間の愛は「もし…ならば」の条件付きの愛です。しかし、神の愛は、「にもかかわらず」の、無条件で絶対的な愛です。ですから、この神の愛の対象から漏れる人は一人もいません。

二、ひとり子を賜ったほどに

神は無条件の絶対的な愛で〈この世〉を愛されたのです。それは人が神から離れていても、神に敵対する者であっても、変わることなく愛することです。さらに驚くべきことは、〈神はそのひとり子を賜ったほどに〉愛してくださったのです。この「賜る」という言葉は、殿様が家来にご褒美を与えるような意味にとられますが、これは実は「お捨てになった」ということなのです。それは、「賜る」のギリシャ語「パラディドナイ」には、「放棄する」という意味があるからです。つまり、「神はひとり子

をお捨てになったほどにこの世を愛して下さった」ということなのです。神は愛の対象、喜びの源であるひとり子イエスを犠牲にしてまで、「この世」を愛されたのです。

そのイエスが、「モーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない」(14)と語られました。これは、明らかに十字架のことを意味しています。ですから、神がひとり子をお捨てになった犠牲とは、イエス・キリストの十字架のことです。神は、一つの罪も少しの汚れもないお方、捨てられる理由の全くないひとり子を十字架におかけになるほどに、この世を愛されたのです。

三、御子を信じる

神はなぜ、それほどまでのことをされたのでしょうか。ひとり子を十字架にかけるほど、世、すなわち私たちを愛して下さった、その愛は私たちに何をもたらしたのでしょうか。それは、

① 永遠の滅びからの救いです。永遠の滅びとは、永遠の刑罰です。その世界は神との交わりのない世界、愛の温度の一度もない、慰めのかけらもない世界、一筋の光さえない暗黒の世界、それが永遠の滅びです。この永遠

の滅びは、確実に、すべての人に来ます。しかし、イエス・キリストの十字架の救いは、この滅びから私たちを救います。

② 永遠の命への救いです。永遠の命とは、ただ単に寿命がいつまでも続くというのではなく、死に打ち勝つ命であり、全く質の違う、永遠に神のもとにあり続ける人生に導き入れてくれる命です。それは、イエス・キリストの復活と同じ復活にあずかることです。

その命を得て自分のものとするために必要なことは、悔い改めと信仰です。①心の罪、言葉の罪、行いのあやまちでも、正直に認めて神に告白することです(イヨハネ1・9)。②もう一つは、イエス・キリストが自分に代わって死んで下さったことを信じることです(ローマ10・9)。

結論

神の愛のゆえに、キリストによって世界のすべての人々に救いの扉が開かれています。すなわち、救いは世界のすべての人々のために備えられています。それゆえこの世の中のどんな人でも、キリストを信じ受け入れるなら救われるのです。

研究資料

(井上義実)

聖書の最高峰、聖書の中の聖書と呼ばれるヨハネ福音書3・16を含む文節である。イエスがニコデモに語られた直後に記されている。イエスが語った言葉の続きなのか、ヨハネの説明なのかが問われる。ニコデモとの会話を受けて、ヨハネが救いについて記したと考えることが妥当であろう。

テキスト

16 神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さったひとり子(ギ)モノゲネース) 形容詞であり、単数形の息子(ギ)フィオス)と共に一人という唯一性が、強調されて用いられている。英訳聖書(NIV)では、ワン・アンド・オンリー・サン(一人にして唯一の息子)と訳している。イエスが賜物として、この世に与えられたのは、神の愛の結果である。神の愛は、人が神から離れていても、敵であったとしても変わらなく愛される愛である(ローマ5・6・8参照)。神の側から、一方的な愛としてイエスを送られた(1ヨハネ4・10参照)。16の世(ギ)コスモス) 新約聖書中186回用いら

れている。ヨハネ福音書に78回、ヨハネの手紙に24回、ヨハネの黙示録に3回、ヨハネは計105回この語を用いている。ヨハネはこの世についての詳細な考察を行なっている。この箇所、この世とは、時代も民族も越えた全人類を指している。神の愛に与れない人は一人もないということである。神に反する忌むべきこの世ではなく、神の慈しみによって救われるべきこの世である。御子を信じる者 信じる(ギ)ピステウオー) 現在分詞能動態で記されている。イエスへの信仰は現在のみならず将来も信じ続けることである。人が持つ自発的、能動的、意思的な信仰であることが解る。滅びない 滅び(ギ)アポルオウ) とは永遠の滅亡を指している。永遠の命との対比で記されていることが多い。この文脈で強調されるのは、永遠の滅びではなく、永遠の救いである。永遠の命 ヨハネ福音書の主題である。イエスによる救いにあるものは信仰によって現在すでに、死から命に移されている(5・24参照)。イエスによって与えられる神の命は、信じた時点より始まり、永遠に及ぶものである。17 世につかわされた つかわす(ギ)アポステロー) ヨハネ福音書では、イエスが神から遣わされたと記す箇

所が38箇所ある。イエスの使命が神からのものであることが示される。他の福音書に比べて特徴的である。世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。さばく(ギクリノー)と訳された語は、広い意味を持つ言葉であるが、終末に不義に定めるという意味も持つ。ユダヤ的思想ではメシヤは義をもつてさばくために来臨するという考えがあった。イエスがこの世に降誕されたのは、人をさばき、滅びに定めるためではない。16節では永遠の滅びではなく、永遠の命を持つために救いを備えられたことが語られている。本節ではイエスが人をさばくのではなく、人を救い、永遠の命に生かすために来られたことが記されている。しかし、再び来られる再臨のイエスには、義とさばきという面が強く表される。

18 彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれていて イエスを通して神を信じることに、信じないこととの差異は非常に大きい。信じる者はさばかれず、信じない者はさばかれる。そのさばきはすでになされていることが示されている。さばかれないイエスを信じる者はさばかれない。信仰によって義とさ

れた義認の結果である。義認は十字架でなされたイエスのあがないを信じることに始まる。神は完全な罪の赦しを与えてくださり、罪の刑罰から解放してくださる。信じる者を義であると宣言され、新しい神からの命に生かしてくださる。さばきにおいては「さばかれない」のであるが、同時に積極的な生に導かれる。さばかれている(ギクリノー) 完了形受動態で記されている。すでにさばきを受けており、なおさばきは継続している。イエスを信じないという決断と意思は、その人が生きている死んでいるという状態に関わらず、さばきに置かれ続けるのである。イエスを信じない者は生きていても、滅びの淵にあるのである。神のひとり子の名 名(ギ)オノマ十戒にある神の名をみだりにとなえてはならないとの戒めから、ユダヤ人は神の名を大切にした。ユダヤ思想では、名は単に区別のためにあるのではない。名は人格、力を宿すものとして受け止められた。イエスの御名は、イエスの性質、イエスの力を持つのである。イエスの名を信じることは、イエスのすべてを信じることである。

参考図書 12月15日分と同じ。

聖書

ヨハネ3・16、21（クリスマス）

タイトル
暗唱聖句神様からの最高のプレゼント
神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。ヨハネ3・16

目 標

神様が送ってくださった救い主キリストを信じ、永遠の命を得る。

導入

（松浦みち子）

クリスマスおめでとうございます。四本のろうそくが灯りましたね。さあ、私たちも心からクリスマスをお祝いしましょう。

皆さんの中でクリスマスプレゼントをもらった人はいますか？ もらっていない人も大丈夫！ 今日神様からすべての人に最高のプレゼントが与えられた日なのです。えっ、いったいどんなプレゼント？ 私たちが手にするものは、どんなに素晴らしいものでも古びたり、なくなったりしますね。でも、神様からのプレゼントはいつまでも変わらない、なくならない最高のプレゼントです。それは何だと思う？ 「かわいい赤ちゃんです」。その赤ちゃんの名前はイエスと名付けられ、布にくるまってやすやすと眠っていますよ。なんてすてきなプレゼントでしょう。

神様からのプレゼント

なぜ、赤ちゃんのイエス様が、私たちにプレゼントされたのでしょうか。それは神様の大きな愛のあらわれなのです。

神様はこの世を創造され、最初の人アダムとエバをエデンの園に住まわせてくださいました。しかし彼らは、神様の命令に従わず、罪がこの世に入り込んできました。その時以来、人は生まれつき罪の性質を持つ者となりました。罪っていうのは、神様の方を向かないで、神様に背を向けて自分勝手に歩むことを指します。この罪を持ったまましていると、人は皆滅びに向かって進んでしまうのです。

ところが、神様は、そういう罪深い「この世」を愛してくださいましたと聖書に記されています。「ふうん、なるほど。神様は世界中の人を愛してくださいましたのか。でも、ぼくには関係ないや」。そう、思わないで、ちょっと、待ってください。関係ない人なんて、ひとりもいません。神様の愛はあなた個人に、ここにいるお友だちひとりひとりに注がれているのですよ。「この世」のところにあなたの名前を入れて読んでみてください。「○」を愛して下さった。ほら、神様が○くん、あなたを愛して下さっていることがわかるでしょう。しかし、残念なことに、なかなかこの愛に気付く人がいません。でも神様は私たちを愛

して「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」（イザヤ43・4、新改訳）と、言い続けてくださっています。

この神様の愛は、ひとり子イエス様を通してあらわされました。人間の赤ちゃんとなつてこの世に来てくださったイエス様は、家畜小屋で生まれ、貧しい大工の子として育ちました。成長されたイエス様は、寝る暇もないほど忙しく、病氣の人を癒し、罪を赦し、孤独な人の友となつて、父なる神様の愛を示してくださいました。そして、最後は十字架にかかり人間の罪の身代わりとして死んでくださいました。これは神様のご計画でした。なぜ、罪のない方が十字架で死なねばならなかったのでしょうか。それは、イエス様によつてこの世が救われるためだったのです。「御子を信じる者がひとりも滅びないで永遠の命を得るため」に、神様はイエス様を誕生させ、その生涯を通して愛を示し、信じる者に永遠の命を約束されたのです。

この素晴らしい神様の愛のプレゼントを、「ありがとうございます」と感謝していただきましょう。永遠の命は天国行きの切符です。信じて受け取るだけでいただける、最高のクリスマスプレゼントです。

例話

「るつちゃんの旅立ち」という本に、藤崎るつ記さんの実話がかかれています。るつ記さんは幼い時、ドイツの宣教師に出会いました。その時「私も大きくなったら外国の人々のために奉仕する人になろう」という決心が与えられ、勉強に励み、熱心な部活動をしたり、教会学校にも励み、高3の時に受洗しました。自分の使命を考えて大学で福祉を学び、さらにアジアの貧しい国の人々に奉仕するためフィリピン大学大学院に入りました。春休み、ビザの取得のため日本に帰る前の空き時間を利用してボトランの地を訪ね、子どもたちと楽しく過ごしました。一九八三年四月二日、送別会の後、泳いでいる時でした。二人の子が溺れかけたのです。るつ記さんは、その子たちを助けようと海に飛び込みました。二人の子は何とか助け出されたものの、るつ記さんだけが息を吹き返しませんでした。二十二才でした。るつ記さんの犠牲によつて大切な二人の子の命が救われたのです。

神様はイエス様の十字架の犠牲によつて、私たちを罪から救い、永遠の滅びから救い出そうとしておられるのです。なんと感謝なことでしょう。

ふいぎうたえト

（こ26、こ改70、ホ32）

聖書 詩篇103・1～22 テーマ 神の恵みを覚える

序論

(福井文彦)

本詩はその題でダビデの作とされている、全詩篇でも最も美しい賛美の詩です。また、世界の多くの人々に知られている純粹な賛美の歌です。作者は神を畏れ敬う者への神の愛を告げています。

一、すべての恵みを心にとめよ

最初と最後に、「わがたましいよ、主をほめよ」と三度(1、2、22)繰り返されています。御霊に導かれた詩人が、全霊全生全身をつくして心の底より神を賛美するようにとの呼びかけです。私たちの魂は、主の恵みによって死から命に移されました。それで、「わがうちなるすべてのもの」が、「聖なるみ名」を賛美することができるのです。

「わがうちなるすべてのもの」が、「聖なるみ名」を賛美できるのは、「そのすべてのめぐみを心にとめることから生れます。新改訳では「心にとめよ」が「何一つ忘れるな」と訳されています。「聖なるみ名」を賛美できる

のは、「すべてのめぐみ」を思い起こすことから生まれます。

「すべてのめぐみ」とは「主の良くしてください」と(新改訳)です。その核心は、主が今すでに、罪の赦しを与えてくださっていることだけでなく、将来的なすべての病のいやしのことです(3)。これは、「あなたのいのちを墓からあがないだし」た時、すなわち、私たちのからだの復活の時に、目に見える形で表されます(4)。すべての恵みの主を賛美しつつ生きるなら、「若返って、わしのように新たになる」(5、イザヤ40・31)歩みとなるのです。

二、神の恵みとあわれみ

6節からはイスラエル民族の歴史を振り返り、神の恵みとあわれみについて詩っています。

神は「正義と公正を行われる」お方です。そして、この「正義と公正」とは、「すべてしえたげられる者のために」行われます。具体的には、イスラエルを虐待するエジプトに対するさばきとして表されたのです(7)。

また、神は「めぐみふか」いお方です(出エジプト34・6、7)。「めぐみ」も「いつくしみ」も、ヘブル語の「へ

セッド」の訳です。神は、イスラエルを「愛し」（申命記7・7）、彼らと契約を結び、彼らに裏切られながらもご自身の約束に真実であられるお方です。

さらに、〈父がその子供をあわれむように、主はおのれを恐れる者をあわれまれる〉愛に富む父なる神です。〈あわれみ〉とは、真実な「父」がその「子」に対していただく感情です。イエスはその「あわれみ」を、放蕩息子^{ほうとうしこ}を待つ父の姿を通して話されました（ルカ15・22）。

私たちは神の恵みのために、しばしば神を賛美します。しかし、そのご性質のため賛美することはまれです。恵みを喜ぶよりも、恵みの主ご自身を喜ぶことが大切です。

三、主の語りかけを聴きつつ生きる

イスラエルの野に咲く花は、驚くほど美しいと同時に短命です（15）。人の一生も草のようにはかなく、その栄えは野の花のように短いものです。しかし、愛なる神はそんな私たちの命を美しく輝かせることができます。その神の愛は永遠であり、過ぎ行くこの世のものではありません（17）。その対象者は、主の愛に満ちた契約を深く心で味わい、昼も夜も黙想し、心に留めて行う人です（18）。

最後に、19節から22節で、〈主をほめまつれ〉との賛美が繰り返されています。ただし、その勧めは、〈わがたましい〉から広げられ、主の使いたち、すべての万軍とすべての被造物にまで向かいます。その根拠は〈主はその玉座を天に堅くすえられ、そのまつりごとはすべての物を統べ治める〉ことを確信しているからです。

この世界には様々な矛盾、不条理がありますが、それは神にある完全な平和を生み出すための座みの苦しみにすぎません。この世界は、神にとって制御不能なのではなく、確実に完成に向かっているのです。主は、ご自身の〈み言葉〉によってこの世界を支配しておられます。その〈み言葉〉が私たちにも与えられています。それこそが、私たちを〈すべてのめぐみ〉に満ち足らせてくださる神の御手のわざの根本です。

結論

全身全霊で主をほめたたえる者の魂は、驚く^わように新たにされ、命の輝きが生まれます。私たちの心の底にある「渇き」を真の意味で満足させてくださる方は、愛とあわれみの主ご自身なのです。

研究資料

(井上義実)

バックストン師はこの詩篇に、「賛美すべき勧め」(詩篇の霊的思想)という表題を付けている。ダビデの作である。愛なる神を表す美しい詩篇として知られている。

テキスト

1 わがたましいよ、主をほめよ ほめよ(ヘ)バーラク
本篇には「主をほめよ」という勧めが五回記されている。神に賛美をささげる理由が説明されていく。わがうちなるすべてのものよ 自分の持てるすべてのものをもつて賛美すべきお方である。聖なる(ヘ)コーデシユ 語源の一つには「明るい」、「輝く」が示唆される。神の栄光、火が関連づけられる。もう一つは「分離」が考えられ、聖別との関わりが指摘される。神がきよいお方であることは、神の道徳的な性質の根本にある。み名(ヘ)シェーム 旧約聖書中は864回使用され、一般的な名という意味でも使われる。先週の「名」を参照されたい。3~5 この3節の間に六つの恵みが記されている。①すべての不義をゆるし(3) 不義(ヘ)アウオン 悪を行なうという意味で、意識的な悪を表す。刑罰とも訳

され、償いが伴うことが解る。不義がゆるされる。②すべての病をいやし(3) 神はあなたの肉体を造られ、あなたの魂を造られた。神は自らの造り成したものを、いかに再生するかをご存知である(アウグスチヌス)。③いのちを墓からあがないだし(4) 墓(ヘ)シャチャス 本来、穴という意味であり新改訳はそうように訳出している。英訳聖書(KJV)は破壊と訳したが、神は肉体の死、霊的な死からもあがない出される。④いつくしみと、あわれみ(4) いつくしみ(ヘ)ヘセッド 語意は広く、「愛」、「あわれみ」、「恵み」などとも訳される。契約関係での忠誠を示す意味があり、神の愛の契約に関わる。あわれみ(ヘ)ラハミーム 元々、親子、兄弟にあるような近親の情愛が原意にある。いつくしみと同様、契約の概念が含まれている。感情的なものではなく、正義と公平と共に表される。⑤あなたを飽き足らせる(5) 飽き足らせる(ヘ)サーバ 願い、求めに応え、良きもので満たされる神である。⑥若返って、わしのように新たになる(5) 猛禽類そうきんのわしは、体も大きく、力強く、高く飛翔することができる。体の小さな鳥よりも長命である。神からの命、力が、わしの

生命力にたとえられている。神の恵みによって、新たな力をいただくことができる（イザヤ40・31）。

6 主は…正義と公正を行なわれる 5節までは作者ダビデの個人的な救いの体験、恵みの証しが記されている。6節からは、イスラエル民族の恵みの証である。主はイスラエルの歴史を通して、正義と公正を表された。

7 主はおのれの道をモーセに知らせ モーセは神に進むべき道を尋ねた（出エジプト33・13）。モーセがシナイ山に登った留守中、偶像崇拜に陥った民を、神が見離そうとされた時であった。モーセの祈りに応えられて、神は民を見捨てられず、カナンへの道を示し続けられた。

8～9 主はあわれみに富み、めぐみふかく、怒ること遅く、いつくしみ豊か…主は常に責めることをせず、また、とこしえに怒りをいだかれない 言葉どおりであり、何ら説明の必要がない。慈愛に富む神の性質は、イスラエルの全歴史を通して表された。

11 天が地よりも高いように 時代と文化が違う私たちには、過大な表現に思える。ダビデの言い回しには、他にも詩篇36・6、57・5などが挙げられる。ダビデの神を知る体験の深さ、培われた信仰の豊かさのゆえであろう。

12 東が西から遠いように 前述と同じように、非常に大きな表現である。神がなさることは、そこまで徹底されるのが解る。

13 主はおのれを恐れる者をあわれまれる 13節からは歴史上のことではなく、現在の恵みが語られている。

15 よわいは草のごとく 草（ハシール） 青草、若草とも訳出。草は雨期には見られるが、やがて枯れる（ヤコブ1・11）。草は人の命のはかなさにたとえられる。その栄えは野の花にひとしい 花（ペラー） も雨期が終わると一斉に咲く。その後の日差しや熱風ですぐに散ってしまう。人の世の栄華の空しさにたとえられている。

17 主のいつくしみは、とこしえからとこしえまでいつくしみ（ヘセッド） 4節で述べたように、神は人との契約を守られる。約束の愛を表し続けるお方である。神の愛は永遠から永遠にいたるものであり、過ぎ行くこの世のものではない。神をほめよ、との賛美が繰り返される。

参考図書 Keil-Delitzsch, "Commentary on The Old Testament, Vol. 5" (Eerdmans) 他

聖書

詩篇103・1～22 (年末感謝)

タイトル

数えてみよう！ 神様の恵み

わがたましいよ、主をほめよ。そのすべてのめぐみを心にとめよ。 詩篇103・2

目標

一年間の神の恵みを覚え、神を賛美する者となる。

導入

(松浦みち子)

今年最後の日曜日ですね。神様はたくさんの恵みをくださいました。その一つ一つを数えて神様に感謝しましょう。

主をほめたたえよ

まず、主をほめたたえましょう。どんなふうにすればいいの？ 神様に感謝と賛美をささげる方法は、型にはまったものではありません。

①自分の持つすべてのものをもって、心の底から主をほめたたえよう。

ある人は歌をもって、楽器を奏でたり、吹いたりすることを通して感謝をささげます。またある人はダンスを踊って主をほめたたえます。アートを通してもほめたたえることができますね。あなたの持つすべてのものを用いて感謝しましょう。

②主の治められるすべての所で、主をほめたたえよう。

もう宇宙は遠い存在ではなくなりましたね。皆さんの中から宇宙に飛び立つ人が出てくるかもしれません。ロシアの宇宙飛行士ガガーリンは宇宙船で地球の周りを回ったときに、「そこに神は見当たらなかった」と語ったと言われています。一方、アメリカの宇宙飛行士アームストロングは、月面に着陸したときに、「わたしは、あなたの指のわざなる天を見、あなたが設けられた月と星とを見て思います。人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか、人の子は何者なので、これを顧みられるのですか」(詩篇8・3～4)という詩篇を地球に伝えたのです。私たちも、ガガーリンのようにではなく、このアームストロングのように、宇宙で主をほめたたえることができるなら何と素晴らしいことでしょう。主が治められるすべての所とは、場所を選びません。あなたの家で、教会で、学校で、旅行先で、友だちと遊ぶとき、塾など、どこでも主をほめたたえることができますね。

すべてのめぐみを心にとめよう

他の訳の聖書を見ると「主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな」と記されています。

①すべての罪がゆるされること：クリスマスにイエス様が誕生してくださったのは、私たちの罪を赦し、永遠の命を与えるため

と学びましたね。罪が赦されるほど素晴らしいことはありません。

②病が癒されること：イエス様は病を癒し、死人を生き返らせることができるお方です。今、難しい病気のお友だちや家族の人もいるかもしれません。イエス様は私たちの体を一番にご存知です。癒し、守ってくださいるお方であると信じましょう。

③命をあがなってくださいること：墓からあがなうということは、死、滅び、行き詰まり、希望のない道から買い取って、引き戻してくださいるという意味ですね。私たちの失敗も罪も、行き詰まりも、みんな解決して、勝利を与えてくださいるイエス様をほめたたえましょう。

④すべての必要を飽きるほど満たしてくださいること：何とすばらしい恵みでしょう。必要が満たされるだけでなく、一生、良いものを溢れるばかり満たしてくださいるのです。

⑤驚のように力強く生きる力が与えられること：驚は、鳥の仲間の中なかでは、体も大きく、力強く高く飛べるし、他の鳥よりも長命です。私たちに神様の力が注がれる時、新しい力を得て生きることができるよう。この一年を振り返って神様の恵みを一つひとつ心にとめ、感謝して一年を締めくくりましょう。

ある少女のお話（ポーター作『少女パレアナ』）

パレアナという女の子は、お父さんの勧めで「喜びの遊び」を始めました。どんな時にも喜ぶことを見つける遊びです。ある時、お人形を欲しがっていたパレアナの所に松葉杖が届きました。がっかりするパレアナに、お父さんは「松葉杖を使わなくても歩けるからうれしいね」といって、喜びの種をみつ付けてくれました。その時からどんなに悲しい時も、喜びの種を感謝することを見つけないことを始めました。しかし、私たちの毎日は願いどおりにはならないことが起きます。でもパレアナは、不平を言ったり、不満を言ったりしないで、どんな時でも喜ぶことを見つけて、周りの人々に喜びと感謝の輪を広げていったのです。

一年の終わりに私たちも感謝の種、喜びの種を数えて、神様をほめたたえましょう。特にイエス様を心にお迎えし、永遠の命を手にし、受洗の恵みにあずかったお友だちは、大いに感謝をささげ、主を証しする者となりましょう。一年のよき締めくくりと共に、新しい年に向かってイエス様を見上げて歩みましょう。

さあ、レッツゴー！

♪わたしのようにな

（ホ8、イン75）

牧羊ひろば



名古屋東教会 教会学校

幼な子らをわたしの所に来るままにして
おきなさい。止めてはならない。神の国
はこのような者の国である。

マルコ10・14

●名古屋東教会 教会学校の始まり

一九九四年春、「名古屋教会の家庭集会伝道所」であった時代に、現在の教会学校の前身というべき形が生まれました。自宅の敷地内を伝道所に提供していた実家の母とともに、小2、小4の二人の息子と4歳の姪に、神様のことを伝えたいという思いがきっかけでした。それは、一緒に讃美歌を歌ったりお祈りをしたりお菓子を食べたりといった小さな集まりでした。そのうちに、息子たちと同じ小

学校に通う子どもたちが集会に集うようになり、主と共にいる感謝な時間を毎週楽しく共有しました。定期的な教会学校の出席者が8名となり、いよいよ主のみ言葉を語るメッセンジャーが与えられることが祈りの課題となっていました。教会学校

でのメッセージの必然性からの定住牧師への希望の祈りです。当時、毎週定期的に遠方から集会を開いてくださった先生方に直々にその願いを語りました。そしてそれが、名古屋東教会伝道所設立に向けての契機となり、その後間もなく教団の第三種教会「名古屋東教会」として伝道師が赴任されました。先生の力強い教会学校への姿勢に子どもたちは益々増え、伝道所の一室を借りて英語教室を開かせていただいていた私の生徒たちも含め、イースターやクリスマスには100人を超える子どもたちであふれるようになり、主の豊かな恵みに感謝しました。

・試練のなかでの恵み

発足当時の名古屋東教会伝道所は、地域の文化発信の機関としては十分機能していましたが、クリスチャンホームの子どもたちの比率が約3パーセントに満たない状態でした。多くの子どもたちが教会に来てくれ感謝ではありますが、毎週の教会学校でのみ言葉の共有というよりは寧ろ、各行事にあふれる子どもたちへの対応に追われている状態で、マルタのように疲れと虚しさを覚えました。二〇〇五年夏、伝道所を管理していた父が天に召され、続いて伝道師も転任して行かれ、さらに伝道所の移転に伴い数年間の無牧の時代が続きました。勿論、教会学校も実質的に機能しなくなっていました。振りだしの状態

です。それでも、主はこの教会を十分に愛してくださいました。そんな小さな教会に来てくれた子どもたちは、寧ろしっかりと神様のみ言葉に触れることができました。主管牧師はじめ諸先生方を通して語られたみ言葉は、子どもたちの心に沁みるものでした。

・主への感謝と期待

二〇〇九年、主は祈りに応えて常任牧師を与えてくださり、教会学校を再編し導いてくださっています。現在教会学校のための大きな力、働き手である教会学校教師も3名与えられ、共に子どもたちの救いのために働かせていただけることを感謝しています。

(長谷川紀子)

●月一回の教会学校(幼稚園児・高校生)

教会に集う3家族の子どもたち7名で、10時半からの礼拝に並行して教会学校を行っています。祈り、讃美歌、メッセージ、ゲームで約1時間の内容です。年齢差がかなりありますので、中高生はゲームリーダーやアシスタントのような仕事をお願いする時もあります。

・心掛けている事

教会学校の前の奉仕者のための30分の礼拝が感謝です。祈り

の一致が恵みとなります。それと、朝の子どもたちの心の様子をよく見る事も心掛けています。兄弟喧嘩げんかしながら教会に来る事などもあり、神様に目を向けるよう持つていくのが大変な時もあります。

・感謝と恵み

以前に比べ子どもたちが落ち着いてきました。突つき合うのが普通の小学二、三年の男の子たちが、彼らなりに、大人の礼拝の献金、祈り、祝祷まで途中から参加出来るようになりました。

二歳の坊やに「静かにしようね」と言っているのを聞いた時には、感動さえ覚えました！三人のベテラン教師がそれぞれに用いられているのも恵みです。私のメッセージの時は主に手作りの紙芝居を使います。フラッシュカードも時々使います。テーマが子どもたちには難しい時は、祈りつつ彼らの心に届く内容を考えます。そして何より準備の中で、自分自身が主の豊かさに浸ることができ、若かった時とはまた違う50代の今の私に語ってくださる主との交わりが、奉仕の喜びです。

・今後の希望

まずは月2回、将来は毎週教会学校ができたらしと思っています。



教会学校の様子

この世の常識に負けない神様の常識を知ること、子どもたちも教師も共に、主にあつて元気を頂き、成長していきたく思います。私自身、教会学校で宝をもらいましたから…。

(小崎泉住美)

●中高生科の礼拝

「キャンプの時のような賛美をたくさんしたい」との中高生の希望もあり、昨年9月より、月1回の教会学校（幼稚園児〜高校生）の日を除く毎週9時45分から10時25分まで、中高生のための礼拝が始まりました。

・心掛けている事

プログラムは、ワーシップソングの賛美、課題を出し合ってお祈り、メッセージ、祈祷、主の祈りと続きます。メッセージは牧羊者を用いていますが、主日礼拝のメッセージも同じ聖書箇所から語られますので、中高生の礼拝では聖書箇所の背景や経緯などを中心に語るように準備しています。またメッセージの初めに聖書箇所から示されたことやわからないこ



礼拝の様子

とを聞いたり、メッセージの途中に質問したりし、神様からの語り掛けに耳を傾けられるように心掛けています。

・感謝と願い

現在は、高校生と中学生の姉弟の2名が出席しています。人数が少ないため礼拝以外に中高生の活動はありませんが、教会の奉仕や教会員との交わりをとおして信仰が成長していることは感謝です。そして友達を誘ってくる教会学校となるように、さらに信仰的にも物質的（施設等）にも整えられるように祈っています。もちろん、近隣に住む中高生が導かれる、地域に根差した教会であるように願っています。

(松尾 雄)

●主の臨在の中で互いに愛し仕えあう教会として

マルコ10・14より、私たちは教会の働きを中心に教会学校があると信じ、開拓教会の小さい群れという恵みも生かし教会全体で子どもたちに関わっています。特に、牧師と教会学校教師たちは、父なる神と主イエスが子どもたちを愛されたと同じ心で子どもたちを愛し育てていきたいと切望し祈り労しています。かつて集った子どもたちも含め、多くの子どもたちの救いと成長のために、聖霊に導かれ用いていただきます。

(清水 百合)

おわりに

『牧羊者』二〇一三年度第Ⅲ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。

今回の教師養成講座は、神戸中央教会の勸士である鎌野健一兄に「分級を充実するために―教員の経験をもとにして―」を書いていただきました。「牧羊ひろば」は、名古屋東教会のCSを紹介していただきました。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

『牧羊者』のご購読・ご利用について

* 分級用に、ワークA（幼稚科向け）、B（主に小学生1～3年生向け）、C（主に小学生4～6年生向け）を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各630円（税込）でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
<http://cs.jccj.info/>

* ご注文は、日本イエス・キリスト教団（事務局）まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

聖書講解	研究資料	メッセージ例	ワーク(A)(B)(C)	中高科へのヒント 子ども聖書日課 フラッシュカード	み言葉カード イラスト	ワーク打ち込み	校
高橋頼男師	福井文彦師	宮澤清志師	中島啓一師	松浦みち子師	飯田勝彦師	鎌野幸師	吉田美穂師
金井信生師	石田高保師	水川武志師	金井由嗣師	小井由徳師	勝田幸恵師	田中裕明師	後藤健一師
井上義実師	小平徳行師	水野晶子師	和田治師	青木みづわ師	小野淳子師	金田ゆり師	藤井洋美師
松浦みち子師	井上義実師	水野晶子師	和田治師	青木みづわ師	小野淳子師	金田ゆり師	藤井洋美師
飯田勝彦師	鎌野幸師	吉田美穂師	勝田幸恵師	田中裕明師	後藤健一師	小野淳子師	金田ゆり師
竹崎光則師	上森恭子師	石田高保師	松浦あん師	丹羽遥師	多田豊子師	長田栄一師	中島啓一師
丹羽遥師	多田豊子師	長田栄一師	中島啓一師	加藤清師	山田和幸師		

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。（中島啓一）

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇一三年度 Ⅲ巻

二〇一三年十月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室
企画監修 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室

印刷所 菱三印刷株式会社
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-5511
電話 (078) 575-5511

* 日本聖書協会「口語訳聖書」使用許諾済み